特46-220
1200500893558
特46
220

世界お伽袋

国立国会図書館

少年文藝

老鼠お伽袋

264
836

同盟館發行

序

東西古今の雄編傑作を輯め、題してお伽袋と稱す、全編悉く教育に關して少年、少女諸子が、日夕の好侶伴たるに勉めたるもの蓋し大に見る處ありて然るが故なり

今や世は擧て虛榮に流れ、只外面の美を裝ふて堅實に學ぶもの、堅實に勤むるもの、堅實に忠良なるもの殆んど其の跡を絶つに至り

44. 4. 8
内交

しは如何にも痛嘆長恨の極と云ふべきか
我がお伽研究會は大に現代の惡潮を刷新し
進んで少年、少女諸子の父兄となりて面白く、
樂しき間に智能の啓發を計らんと欲するもの
なれば、本書が如何に有益のものたるかは乞
ふ其内容に依りて知り給はん事を敢て云ふ

明治四十四年彌生中院

編者識

特46
220

目次

黄金の鳥……一
ラコニア人の答……二三
恩知らずの客……二五
アレキサンダーとブシフアラス……二七
賢人ダイオジエニス……三一
勇敢なる三百人……三四
ソクラテスと其家……三八
國王と其の鷹……三九
醫師ゴールドスミス……四七
王國……四九

バーメサイドの饗宴……五四
盲人と象……六一
呆助さん……六五
蜘蛛と蚤……七八
征服者ウキリヤム王の王子……八四
白船……九一
國王ジョンと僧院長……九六
慾野深助君……一〇八
物言ふ骨……一一一
三つの言葉……一一七
四人兄弟……一二三
三人の懶惰者……一三六

青い光……一三八
藁と薪蠶豆……一五〇
老犬……一五三
大きな蕪……一六〇
浮かれ胡弓……一六四
サー・ウオルター・ラレイ……一七二
ポカホンタス……一七八
ジョージ・ワシントンと彼の手斧……一八〇
グレース・ダーリング……一八二
ウキリアム・テルの話……一八七
アーノルド・ウインケルリード……一九一
アトリーの鐘……一九五

如何にしてナポレオンはアルプス山を越えたか……二〇五
シンシンナタスの話……二〇七
レギユラスの話……二一五

目次終

少年文藝

世界お伽袋

お伽研究會編

黄金の鳥

或る所に、一人の王様がありました、また其のお庭の中に、一本の林檎の樹があつて、黄金の果實を結ぶのでした、毎年花が落ちて、やがて小指程の林檎が葉隠れに見ゑる頃になりますと、王様はチャンと林檎の數を勘定し、秋の初めに熟するのを、何よりの樂しみになさいました。

お庭の木立に涼風が立つて、尾花の穂が出る頃になりますと、不思議なことには、御秘藏の林檎が一つなくなりました、王様は大層お怒りになり、大切な林檎を何者

が盗み行くか、夜の明ける迄嚴重に番せよと、お庭番に嚴しくお吩咐けになりました。

王様の嚴しい御命令にお庭番は縮み上り、早速其の夜から自分の長男に番をさせました。

お庭番の長男は、其の夜林檎の樹の下に立つてマンジリともせず、闇を見張つて番をして居ましたか、眞夜中頃になると、魔がさしたやうに睡氣ざし、たうとう大地にべタりと寐て仕舞ひました、そして翌朝早く見ますと、又林檎が一つなくなつて居るのです。

次の夜はお庭番の次男が代つて、林檎の番を致しましたが、氣味の惡るい眞夜中の風が吹いて來て、草木も眠る頃になると、上瞼と下瞼が我れ知らず寄つて來て、是も同じく寐て仕舞ひました、すると翌朝又林檎が一つなくなつて居るのです。

お庭番はもう弱りはて、此上は自分に夜番をせねばならぬかと、思案にくれて居

ますと、末子が殊勝にも父の前に出て、今夜は私が番をいたしませうと申しました、けれども父は、前の二人の子に懲りて居るので、容易に安心いたしませんでしたが、達而行かして呉れと望みますから、また試みに夜番を致させました。

末子は其の夜林檎の樹の下に立ちましたが、萬一の用意にと手に弓を持ち、心を靜め氣を配つて、油斷なくして居ました、やがて何處とも知れぬ遠方の方で、眞夜中を告げる時計の音が、物懶氣にチーン〳〵と鳴り、四邊がシーンとなりますと、頭の上の方でバサ〳〵と羽音がしたかと思ふ暇もなく、一羽の鳥が林檎の枝に棲り、頻りにコツ〳〵と嘴で林檎を突き初めました。

末子は占たと喜んで、微かな星明りを便りにジツと見ますと、全身黄金の鳥で御座います、末子は矢を弓に能く番ひ、狙ひを計つてピューと放つと、矢は鳥に中たらないで逃げましたが、黄金の尾羽を一本落してゆきました。

翌朝になると、末子は早速黄金の尾羽を王様に献じまして、昨夜の仕末を悉しく

申述べました、王様は世にも不思議な羽があればあるものと、多くの御家來にお見せになりました、御家來衆も目を丸くして珍らしがり、この一本の黄金の羽は、全王國の富よりも貴いものだと褒めました、しかし王様は猶ほも欲しいとお考へになつたので、尾羽一本では何とも仕方がない、その黄金の鳥を捕へねばならぬと、仰せられました。

お庭番の長子は、首尾能く黄金の鳥を捉へて、前夜の恥辱を雪ぐのみでなく、御褒美を戴きませうと思ひましたから、父に許可を得て旅に出ました。

すると或る森の所に出ましたが、一疋の狐が楠の下にヒョッコリ現はれました、長男はよき獲物と思ひ、早速射て殺さうと致しますと、狐は惶忙しくとゞめまして、『私を射てはなりませぬぞ、私は貴下に能い智惠を授けて上げます、私は貴下が、何の御望みで旅をなさるも能く存じて居ます、今晩貴下はある村に御安着なりませう、而してその村に、二軒の旅館が向ひ合つて建つて居るのを御覽になりませ

う、そしてその一軒は、大層美しくて愉快氣に見ゑますが、決して貴下お入りになつてはなりません、もう一軒の方は、夜分見ますと隨分陋苦しさうな、穢い建物で御座いますが、必らずこれにお泊りなさい』と、親切に教ゑて呉れましたが、血氣に逸る長男は耳にも入れません、この畜生が生意氣に、何を知るものかとフンと鼻で笑ひ、弓を取り直してピユと放ちましたが、矢は中らずに狐は逃げて仕舞ひました。

長男は逃げる狐を見向きもせず、行手を頻りに急ぎますと、夕暮に或る村に入りました、見れば狐の言つたやうに、二軒の宿館が向ひ合ひに建つて居まして、一軒の家からは多くの人々が、陽氣に踊つたり謠つたりして、面白さうにお酒宴をして居るのが見ゑますが、もう一軒の方はと見ますと、ヒッソリとして、見るからに貧乏たらしく御座いました、長男は思はず有頂天になり、『あんな面白さうな旅館に泊らないで、こんな穢ならしい旅館に泊るなんて、そんな馬鹿氣たことが世にあるも

のか』と、到頭陽氣な美しい方へ泊り込み、飲んだり喰べたり騒ぎ散らして、大切な王様のことや、黄金の鳥のことは、スッカリ忘れてしまいました。

それは偖置き王様の方では、幾日たつても、お庭番の長男が歸つて來ませぬのみならず、音信さへ少しも御座いませんから、お庭番は心配して、次男を旅へ出しました。

次男も又長男と同じやうに森の所まで來ますと、以前の狐が居て、前と同じ忠告をして呉れましたが、やがて夕刻に、例の二軒の旅館の前までまゐりますと、大勢の人が面白さうに、陽氣にお酒宴をして居る旅館の窓から、長男が次男を手招きして居ましたから、是も同じく兄と一所にお酒を飲んだり、騒いだりして、大切な王様のことや、黄金の鳥のことは、スッカリ忘れてしまひました。

また月日がズン〳〵經ましたが、先きにまゐりました長子は無論のこと、次男も歸つて來ませんのみならず、少しの音信も御座いません、お庭番の末子は二人の兄

を心配し、黄金の鳥を捜し旁々、兄の行方を尋ねる爲め、旅に出して呉れよと願ひましたが、父はなか〳〵免しません、三人の内でも一番可愛い子で、また一番年弱で御座いますので、道中に万一の間違ひでもありましたら、取返しのつかぬ一大事と思ひましたからです、しかし末子は飽く迄願つて止みませんから、父も致方なく、二人の兄を捜し出さなくつても、又黄金の鳥を捉へなくつても、早く歸つて來て呉れと呉々も念を推して旅へ出しました。

末子は喜び勇んで、途を急いで行きますと、又例の森の樹の下で狐に遇ひ、二人の兄と同じ忠告を受けました、しかし兄さん達のやうに、射て殺さうなぞと致しませぬのみか、大層喜んで禮を述べました。

狐も言ひ甲斐ありと喜びまして、『貴下私の尾の上にお乘り下さい、一生懸命で駈け出しますから』と申すので、末子は少しも疑はず其の通りに致しますと、狐は風の様にかけ出しました、その早いことゝ申したら、尻尾の毛が吹く風にヒユーヒ

ユーと鳴つて、眼に見ゐる山や河や野が、却つて一目散に走せ出すやうでありました。

瞬く間に、二軒旅館のある村に着きましたが、末子は狐の忠告通りに、陽氣な美しい方には見向きもせず、陋苦しい陰氣な方に一夜の宿をとりました。

すると翌朝、末子はまたも旅裝束をして出掛けやうとした時、昨日の狐かヒョツコリと來て、『側目もふらず、唯眞直にお行きなさい、さうすると大きな城が御座いまして、多くの番兵が居ますが、皆高鼾でたわいなく眠つて居ますから、構はずずん〳〵城の中へお進みなさいますと、奥の方に穢ない木造の鳥籠があつて、貴下のお捜しになります黄金の鳥が飼つてあります、唯御注意致しますのは、そのすぐ側に美しい黄金作りの鳥籠が御座いますが、もしもその美しい鳥籠に目を奪はれて、それに鳥を移して持つて來やうとなさいますと、飛んだ取返しのつかぬ御後悔が御座いますよ』と、以前のやうに尾を差し出しました、末子は昨日で慣れ

て居ますから、心得てヒョイと載りますと、また風を切つて矢のやうに馳出しました。

程なく城の大木戸までまゐりますと、狐の申したに寸分違はず、番兵がたわいなく眠つて居ますので、末子はずん〳〵と奥の方まで進んで行くと、果して黄金の鳥が見苦しい鳥籠に居ますのみならず、盗まれた三つの黄金の林檎が、チャントその儘置いて御座いました。

すると末子はふら〳〵と迷ひ出し、狐が親切に言つて呉れた忠告を忘れてしまひ、『こんな美しい黄金作りの鳥籠が現在此處にあるのに、見苦しい木作りの籠の儘持出すなんて、そんな馬鹿氣たことが出來るものか』と自分で問ひ自分で答へて、黄金の鳥を黄金作りの鳥籠に移さうと致しますと、鳥は一聲絹を引裂くやうな、けたゝましい聲で鳴きました。

黄金の鳥の鋭どい鳴聲に、前後も知らず高鼾で眠つて居た番兵は、驚ろいて目を

覺して馳寄りまして、難なく末子を荒縄でぐる〳〵巻きにし、王様の前へつれてまゐりました。

その國の王様は大層お怒りになりまして、直に多くのお役人をお呼び寄せになり、いろ〳〵御詮議のあつた末、憎むべき由々しい大罪人で御座いますから、死刑に處することゝ極まりましたが、もし末子が日頃その國の王様のお捜しになる、瞬く間に千里も走るやうな黄金の馬をつれて來ましたら、一命を助げらるゝのみか、黄金の鳥も下さることになりました。

世にもむつかしい約束の下に再び旅に出ました末子は、黄金の馬なぞある筈も御座いませず、またあればとて雲を捉むやうな當所もない捜しものなのに、如何したらよからうかと頻りに大息をついて、悄然と元氣なく歩んでまゐりますと、また狐が出て來て、『如何です、私の申しました事を御聞きなさらないと其の通りですよ、しかし貴下が、今度こそ私のいふことをお疑ひなさいませんでしたら、黄金の馬の

在所をお教へいたします、今日もたゞ眞直にお行きなさいませ、又一つのお城の前に出ますから、お構ひなく城中へお進み下さい、すると奥の方に一つの厩が御座いまして、そこに黄金の馬が繋いであります、お馬の番をする小厮は、皆高鼾で前後も知らず眠つて居ますから、ソッと馬をお曳き出しなさいませ、だが又御注意致しますのは、その側に黄金作りの立派な鞍が御座いますのに、黄金の馬は古びた穢い革の鞍をして居ますから、貴下は其の美しひ鞍には目も觸れず、穢い鞍の儘でおつれ出しなさい』と申しまして又尾の上に末子を載せ、風を切つて馳出しました。

二三分間も經つたと思ひますと、もう末子は狐の申しました城の大木戸の前に來ましたから、少しも恐れずにずん〳〵と入つて行きますと、案の條一つの厩が御座いまして、黄金の馬が繋いでありますが、お厩番の小厮等はぐう〳〵眠つて居ます、末子はソッと足音を盗んで馬の側に近寄りました時、すぐ下に置いてある黄金作りの鞍を見て、『偖も美しい鞍が世にあればあるものだ、狐の注意した言葉はある

もの〻、この美しい鞍を、あの珍らしい馬におかないで、どうして穢らしい古革鞍がおけるものか、此度は爲損せずにうまくやりませう』と黄金作りの鞍に手を觸れましたら、カタンと大きな音が致しました。

黄金作りの鞍の音に、前後も知らず眠つて居た小厮等は喫驚して目を覺し、馳寄つて難なく末子を捉へました。

又しても失敗つた末子は、翌朝お役人の前へ引摺り出されまして、死刑にせらるゝことに極まりましたが、もし美しい王女をお伴れ申したら、一命を助けらるゝのみならず、黄金の馬も、黄金の鳥も下さることゝなりました。

重ね〴〵の失敗に、末子は泣き出したい程になりましたが、どうも致方が御座いません、とぼ〳〵と又當所もなく旅へ出ますと、狐が今日もまゐりまして、『何故貴下は私があれ程申しましたのに、少しもお聞きになりませんのです、然し貴下が全く心を取替へて、本當に私を信じて下さいましたなら、もう一度いゝ智惠を授けませう、此處から唯眞直にゐらつしやいますと、夕方また或る城の前に出ますから、眞夜中の十二時になるのをお待ちになつて、王女のお寢間へ潜ひ込んでお伴れ出しなさい、今度も御注意致しますのは、その方が何と仰有つても、決して御兩親に暇乞をさしてはなりません』と申しまして、また尾の上に末子を載せ、風を切つて馳出しました。

末子は程なく、狐の申しました通りの城の前に出ましたので、夜の十二時になるのを待つて窃と城中に潜び込み、王女の御寢間を難なく搜しあて、『さあ、これから私と一所に行きませう』と申しますと、王女は容易く御承知なさいましたが、唯さめ〴〵と涙を流して、『どうか、たゞ一度だけお父さまやお母さまに暇乞をさして下さい』と、縋付いてのお願ひで御座いました。

末子は狐の申すことを聞きませんで、酷ひ目に遇つてもう懲りて居ますから、初めの内は頭を左右に振つてなか〳〵聞入れませんでしたが、王女に止所なく泣きつ

かれ、果ては自分の足下に平伏して世にも悲しけに歎かれますので、もう可愛相々々で堪へきれません、『それでは一寸の間にお暇乞をなさるんですよ』と、倒頭仰有るが儘になりました。

王女は喜しげに美しい顔に靨を見せ、いそ〳〵とお父様のお寐間の方へ二足三足お馳け出しになりますと、宿直の番兵等が、その足音に驚ろいて目を覺まし、ば ら〳〵と寄つて、難なく末子を捉へてしまひました。

番兵等が末子を縄でぐる〳〵巻きにして、王様の前につれて來ますと、王様は火のやうにお怒りになりましてジッと瞋附け、『さても〳〵汝は不敵な奴だ、大切の姫をつれ出さうなどゝは、殺しても尚ほ飽足らぬ奴だ、生命がおしくば明日から八日の間に、あの窓から目障りな山を、眺望の邪魔にならぬやうに何處かへ堀り毀して退けてしまへ、それでなくば姫をやることはならぬ』と、嚴しくお吩咐けになりました。

無理な命令では御座いますが、どうせ殺されるものと覺悟して、せめて七日の間でも生き延びやうと、末子は翌朝早くより蟻が堤でも毀すやうに、一生懸命で働きましたが、七日目の夕方になりましても、ほんにポッチリしか毀せませんので、もう膽落して明日はいよ〳〵殺されるのかと、今更狐のいふ通りにせなんだのを頻りに悔みつゝ、ホッと氣息をついて居ますと、又何方からともなく狐が來て『貴下、御心配なさいますな、貴下は何にも苦にせず寐ておいでなさい、私が代りに働きますから』と申しますので末子は大きに力を得て、グッスリと疲れた身體を横にし、前後も知らず寢入りましたが、翌朝目を覺して見ますと、さしもに大きな山がサッパリと拭つたやうで御座いましたから、不思議に思ひながらも大層喜び、早速王様の前に出て、王女を戴きたいと申込みました。

王様は今更約束を反故にも出來ず、止むなく王女を下さいましたから、末子は大きに喜び勇んで、出立いたしますと、途中でまた狐が來て、『貴下は王女と、黄金の

馬と、黄金の鳥の三つを、お手に入れねばならぬでは御座いませんか、後の二つはどうなさいます』と言はれましたので、餘り嬉しさに後の二つを忘れて居たのに氣が付いて、『嗚呼さうであつた、後の二つもなか〳〵の大仕事だ、何か能い工夫はあるまいか』と、當惑顔して尋ねました。

狐はさもこそと合點顔に、『それはたいした事でも御座いません、美しい王女をつれて來いと命じた王樣の所に、そのお姫樣をつれていらつしたら、王樣はほく〳〵の大喜びで、約足通りに黄金の馬を貴下に呉れるに相違御座いません、其の時貴下は、逸早く其の黄金の馬にお乘りになり、王樣始め皆々に篤く御暇乞をなさるのです、其がすみましたら、此度は王女にお手をお差出しになり、握手の禮をなさるやうな風で急いで鞍に引上げ、手早く鞭をあげて一目散にお逃げだしになれば好いのです』と、細々と仕方を敎へました。

末子は大變に喜び勇み、早速黄金の馬のゐる王樣の城に立寄り、狐の指圖通りに

して、王女と馬との二つを手に入れましたので、王女と共に一つ鞍に乘つて驀地に途を急ぎますと、また狐が出て來て、『此度は黄金の鳥の居る王樣のお城へ、その黄金の馬に乘つてお行きなさい、尤も王女はお城の外にお待たせしなければなりません、屹度王樣は黄金の馬を見て飛び立つ許りに喜び、早速黄金の鳥を持ち出すに違ひ御座いません、其の時貴下は鞍からお下りなさらず、乘つた儘鳥をお受取りになつて、子細に贋物でないかと調べるやうな風をなさるのです、そして隙を計つてお逃げ出しなさい』と謀計を授けました。

末子はまたも狐の申します通りにして、首尾能く黄金の鳥を入れた鳥籠を手に提げ、黄金の馬に王女と二人乘りまして、疾風の如く馬の足搔を急がせ、やがて一つの大きな森の邊に出ますと、また狐が來て、『貴下、此度は私が貴下にお願ひが御座います、どうぞお慈悲に私を殺して、私の頭と足とを斬り離つて下さい』と賴みました、外の賴みなら格別、今迄散々厄介になつて、大切な生命まで幾度も助けても

らつた狐が何して殺せませうか、流石の末子も途方に暮れて居ますと、狐は『それならばそれで宜しう御座います、貴下も首尾能くお仕事がすんで結構ですが、此處に吳々も御注意申したいのは、この先き途中に於きまして、絞架に上されやうとする哀れな罪人を御覽になつても、決して救つてやつてはなりません、又二つには、どんなにお疲勞になつても、決して河岸にお休みになつてはなりません、申したいのはこの二つで御座います』といふより早く何處へか行つてしまひました、末子は道すがら、『今迄狐が注意して吳れた事は、出來さうでなか〳〵出來ぬ事ばかりで、幾度も彼の御厄介になつたが、今度のばかりは容易ことだ』と、獨りつくづく考へながら、猶も行方を急ぎました。

末子は馬を急がせて、二軒旅館の差向ひにありまする例の村に入りますと、近所の人々が街道へ出て、頻りに罵り騒いで居るのを見ましたから、何事か騒ぎが起つたのかとその内の一人に尋ねますと、『其の人は『別の事でも御座いませんが、只今

二人の罪人が絞架に伴れられて行く處なのです』と申しますから、末子も其處に馬をとゞめて、どんな罪人かと見て居ますと、やがてしほ〳〵と役人に伴れられて行く二人の罪人は、何と驚ろくでは御座いませんか、現在二人の兄でした、末子は喫驚して、『何うかしてあの二人の罪人を、助けだす手段はあるまいか』と、先きの一人に尋ねますと、『どうして〳〵、あの二人は大金を奪つた大盗賊ですもの、盗まれた人にそれだけのお錢を返さないじや、助ける道は御座いません』と申しました、末子はもう狐に注意されたこともスツクリ忘れて無我無中になり、その盗んだといふ大金を贖ひ、二人の兄を救ひ出して、家路を指して急ぎました。

三人の兄弟と王女とは、黄金の馬と、黄金の鳥とを携へ、以前狐に遇つた森陰まで戻りますと、心地のいゝ涼しい風がそよ〳〵と吹き、水晶を碎いたやうな小河の流れが、ちよろ〳〵と優しい音をたてゝ居り、一面に青い苔が天鵞絨を敷き詰めたやうで御座いました、二人の兄は末子に向ひ、『なんとこの涼しい小河の岸で一

休みして、氣持よく辨當でも喰べやうではないか』と申しますから、『さうしまし
う』と、末子も餘り疲勞たので、うかと狐の注意も忘れ、河岸にドッカと座つて涼
風を入れて居ますと、二人の兄は顔を見合せてニヤリと笑ひ、後へ廻つて弟を河
に投げ込んで、黄金の馬も、黄金の鳥も、さては王女まで盗んで故郷へ逃げ歸りま
した。

二人の兄は早速王様の前へ出て、『私共二人、長らくいろ〳〵苦勞を致し御所望
の黄金の鳥のみか、黄金の馬も、美しい王女も伴れて戻りました』と、言葉巧みに
申上げましたので、王様は一方ならぬ大喜び、篤く二人の手柄をお褒めになりまし
たが、肝腎の鳥は少しも囀りません、馬は項垂れて物も喰べません、可愛らし王女
は泣いていらつしやる許りです。

それは偖置き、二人の惡るい兄の爲めに、河の中へ投げ込まれました末子は、幸
ひ水が淺かつたので、一命は輕うじて拾ひましたが、何分骨を酷く打つたので、身

動きすることも出來ません、由動くことが出來たとしても、岸が嶮しくて攀登るこ
とが出來ませんから、空しく死を待つより外に仕方が御座いません、末子は身の痛さ
も忘れ、狐の注意を幾度も疎かにした自分の身の不始末を後悔して居ますと、未だ
見捨てずに例の狐が來て呉れましたが、然しいつもの機嫌のいゝ顔はせず、痛く注意
を無にしたことを責めました、が、見す〳〵河底に末子を棄てゝおくことは致しませ
ん、『さあ、私の尾にお掴りなさい』と、自分の尾に掴らせて、難なく河岸に助け出し
て申しますには、『貴下の二人の兄さんは自分達の罪の發覺るのを恐れ、貴下がお城
下に入つたら、殺さうと巧んで居ますから、充分に御注意なさい』と申しました。

末子も今は狐の申す注意が、骨身に滲み込むやうに御座いますから、身形をスツ
クリ貧乏人に變へ、人目にかゝらぬやうにソッと王様の御殿を潜りますと、黄金の
鳥は樂しさうに、いゝ聲で囀り出しました、黄金の馬は勢ひづいて乾芻や大豆をお
旨しさうに喰べ出しました、王女はスッカリ泣くのをやめて、美しい顔でニコ〳〵

と笑ひ出しました。

末子は到頭王様の前まで出まして、兄さん達の惡事を殘らず告げましたから、王様も初めて夢の覺めたやうにお驚きになり、早速二人を捉へて重い刑罰になさいまして、末子には改めて連れて來た王女を下され、目出度結婚の式を擧げて王子になさいましたが、王様がお崩御になつた後、到頭王位に即きました。

それから久しく年月の經つて後、王様になつたお庭番の末子は、ある森の中を此處彼處と歩いて居ますと、昔恩を受けた狐に出遇ひました、狐は王様の顏を見るや兩方の眼に涙を一杯ためて、『どうか何よりのお願ひですから、私を殺して頭と足とを斬り離して下さい』と、大地に頭をつけて賴みますから、王様も初めの内は流石に殺し兼ねて居ましたが、餘り狐が賴みますから、心を鬼にして一刀の下に打殺し、頭と足とを斬り離しますと、狐の死骸は見る〳〵一人の氣高い貴公子となりました。

ラコニア人の答

羅馬を去る遙かなる所に希臘なる名高い國がある、希臘は元來羅馬のやうに國が一團となつて居らず、國中が數個の州に分れて、其の州毎に各自の主權者があつたのである。

其の希臘の國の南部の人民をスパルタと人と呼んで、彼等は淳樸質素な習慣風俗と勇敢なるとが爲めに世に知られてゐる、そして此のスパルタ人の住んだ地方をラコニアと稱する所から、スパルタ人を一名ラコニア人とも云ふのである。

で、此のラコニア人の間に互ひに守られた不思議な制度の中で、最も聞いて稀らしく感ずるのは、彼等相互の談話は出來得るだけ簡潔でなければならぬ、要事以外に餘計な言葉を用ひてはならぬといふ一事であつた、だから極く簡單な答を、世の人がラコニア人的だといふのは斯くの次第からである。

所が又同じ希臘の國の北部にマセドンなる地があつて、曾て戰爭好きのフキリップなる王が此の地に君臨してゐた事があつた。

マセドンのフキリップ王は唯一州に止まらず、全希臘の主宰者たらんことを欲して大軍を起し、蠶が桑の葉でも食べるやうに見る〳〵他州を侵略し、今はラコニア地方を除くの外、殆んど全希臘の諸州は否でも應でも彼を王と仰かねばならぬ次第となつた、茲に於てフキリップ王はラコニア地方のスパルタ人に書面を送り、其書面には、

『若し大軍を帥て汝の國に到れば、予は立所に蹂躙し盡さん。』

と書いておいた。

數日にしてスパルタ人から返書が屆いた、フキリップ王は早速開封して見ると、白紙の隅に唯若しと書いてあるばかりであつた。

其の若しの意味は、

『汝の進路に未だ若しのある以上は、スパルタ人は決して汝を恐るゝものにあらず。』

と云ふのであつた。

三一、恩知らずの客

フキリップ王麾下の精英なる幾多の兵士中に、以前は隨分勇敢なる武功を奏した貧しい一人の兵士があつた、彼は有らん限り色々に手を盡して王を喜ばす、王も亦二なき者と彼を信用するに至つた。

或日のこと此の兵士が端艇に乘つてゐた時、突然大暴風雨の襲來に遇ひ、端艇は暗礁に吹上げられて難破してしまひ、兵士は半死半生の體で海岸に波の爲め打上げられたが、若し其の附近に住んでゐた一農夫に救はれて、其の親切な介抱を受けなんだら、無論死んでしまつたに相違ない。

兵士が充分健康も元氣も回復して故山に歸れるやうになつた時、彼は農夫に向つ

て今迄の親身も及ばぬ介抱を謝し、且つ此の好意には必らず報ゆる時があらふと約束した。

然し兵士は彼の約束を守らなんだ、彼はフヰリップ王に生命を救はれた恩人の話は曖氣にも出さぬのみか、何處其處の海岸には見事な耕地がありますが、自分は彼のやうな土地を所有地としたら嘸樂しい事で御座いませう、何卒彼處を頂戴する譯には參りますまいかと只管に懇願したので、王も功臣の事であるから、

『成程、然し其の土地は誰の所有地ぢや。』

『否なに、お國の爲めには塵程の功もない土百姓の土地で御座ります。』

『諾々、然らば其方は長らく予が爲めに仕へた功もあるから、其方の願望を聞届けてやる事にしやう、今から行つて其の土地を所有地としたら宜からう。』

そこで兵士は其の地に急行し、瀕死の際に助けて呉れた恩人を家から追出し、無理無體に其の土地を奪ふて自分が所有主となつた。

憐れなる農夫は兵士の振舞を心から憤り、一も二もなく思ひ切つて王にお目通りを願ひ、一伍一什を殘らず話して其の明察に訴へた、王も偖は日頃から斯程迄に信任した彼奴は、そんな人非人な卑しい行爲をする奴であつたかと大に怒り、早速人を使はして兵士を至急召還し、額に『恩知らずの客』の文字を灼きつけた。

斯くして王は、此人間こそ自ら富まんとして卑しい行爲をした奴だと國中一般に知らしめた、そして此の兵士は其の日から死に至る迄、人々から忌み嫌はれて狹い悲しい世を渡つたとの事である。

アレキサンダーとブシファラス

或日フヰリップ王はブシファラスと呼ぶ名馬を買つた、此の馬はなか〳〵の駿足で隨分と高い金を出したのだが、何分氣が荒くて人馴れがしないので、誰一人として乘り廻すことは無論のこと、如何なる用途にも向けることも出來なかつた。

で、臣下等は馬を鞭打つて馴らさうぞしたが、益根性を枉げて猛しくするばかりなので、王も到頭厭倦んでしまひ、斯んな馬は早速朕が目通りを退けよと命じた。

『父上、斯程の駿馬を駑馬と共に朽ちさすは惜しい事に存じます、』

未だ年若の王子アレキサンダーは然も齒痒さうに、

『皆の者共が馬の馭し方を知らぬから御意の儘にならんのです。』

父王は若年者が出過ぎたと言はぬがりに冷笑を浮べて、

『多分其方は皆の者共より馬の馭し方を存じて居らうな。』

『はい存じて居ります、』

とアレキサンダーは判然答へて、

『父上がもし私に其の馬をお任しさへ下らば、此處に居る者共よりは上手に取扱つて見やうと思ひます。』

『ぢやが其方失敗つた時には如何する？』

『はい、若し私が失敗りましたる時は、其の馬の代價を拂ふ事と致しませふ。』

臣下等は彼の弱年の王子が、自分達でさへ散々手に餘した暴馬を乘りこなさうとは身の程不知だ、今に大怪我でもして赤耻を掻く位が關の山だと言はぬばかりに冷笑して見物してゐた、アレキサンダーはつか〳〵とブシフアラスの側に寄り、靜かに馬の首を太陽の方に向けた、これは王子が馬は自分の影法師に恐れるのだから、其の影の出來ぬやうに太陽の方にさへ向ければ大丈夫だと賢くも氣が付いたからである。

そしてアレキサンダーは物和かに馬を勞り、撫でるやうに平手で頭を輕く打つてやり、馬が少し氣分の鎮まつたのを見て、飛鳥の如くひらりと跨がつた。

冷笑を以て王子を迎へた臣下等は、今に見よ彼の生意氣な向ふ見ずの子供が、鞍から振落されるか蹴られるかして、屹度殺されるに相違ないと見てゐた所、アレキサンダーは馬上優に跨つて思ふが儘に駈け廻り、ブシフアラスが追々に疲れたと見

るや手綱捌も鮮に、再び元の所に馬を向けて、父王の前に取つて返した。

臣下の面々はアレキサンダーが自己の言葉に違はず、さしもの暴馬を首尾能く乘りこなした手際に舌を捲き、王子こそ言行一致の好騎者よと感嘆の聲を振り絞つた。

アレキサンダーが父王の前に身輕く跳び下りるや、フヰリップ王は矢庭に走り行つて王子に接吻を與へ、

『父がマセドン國は其方に小さ過ぎる、其方は其方の身に相應はしい、もつと大きな王國を求めねばならぬぞ。』

其後アレキサンダーと名馬ブシフアラスとは宛然友達のやうになり、馬も主人公に能く馴るれば、主人公も亦二なき物として愛した、だから王子と馬とは影の形に從ふが如く、何時でも一緒にゐて離れた事はないと謂はれた位で、王子でも馬でも其の何れか一つが目に付けば、屹度他の一つは其傍らにゐたのである、斯くの有樣で馬はアレキサンダー一人には能く馴れたが、他の者には相變らずの暴馬で、鞍に

も觸れさす事ではなかつた。

後年アレキサンダーは世界に名たゝる王となると同時に、今日に至るまで誰知らぬ者なき勇士となつた、此の故に彼は今も尙ほアレキサンダー大王と呼ばれ、歷史の上に千古も朽ちぬ英名を殘してゐる。

ブシフアラスは無論大王の遠征に伴はれ、幾多の山川も跋渉し、幾多の激しい戰塲をも駈け廻つた、而してあらゆる險難を冒して物ともせず、大王をして九死に一生を得せしめたのは、決して一再に止まらなかつたのである。

賢人ダイオジェニス

昔希臘の國コリンスと謂ふ所に、ダイオジェニスと呼ぶ賢人があつた、で、彼の敎を乞はんとする者國中より集まり來て、親しく其人に接して其の言ふ所を聞くのであつた。

成程賢人には相違ないが、ダイオジェニスは隨分いろ〳〵奇體な癖を持つてゐた人で、總て人間と謂ふものは、自分が眞に無くてはならぬ物さへあれば大丈夫だと信じ、夫れ以外な物は實際無用だと言つてゐた。

それで彼は住むべき家は持つてゐない、樽や桶の中に眠つて、今日は東明日は西といつた具合に、自分の思ふが儘居を轉がし歩いて別に所も定めず、大概日中は負喧しながら徒爾と座り、己が周圍に群る人々に敎を垂れてゐたのである。

或る眞晝のことであつたが、ダイオジェニスは提燈に火を點火して、町々をうろ〳〵と瀬に何か搜し歩く樣子であつた。

『お日樣が輝いて御座るに、何故先生は提燈をお持ちで御座る？』

と或者が尋ねると、ダイオジェニスは眞面目な顏で、

『否、他でも御座らぬ、正直者は無いかと搜してゐるのだが、提燈があつても容易に見付からぬ。』

彼が諷刺的敎訓は先づこんな風であつた。

アレキサンダー大王がコリンスに行つた時、市で重立つ者は悉く出でゝ王の英姿に接し、あらゆる稱讃の辭を以て歡迎したけれど、ダイオジェニス一人は如何なる故か姿も見せぬ、しかも大王が此度コリンスへの旅行は、賢人ダイオジェニスに親しく面會して、其の敎を乞はんとするのが第一の目的であつたのだ。

そこで大王も肝腎な賢人が出て來ぬので仕方なく、自から彼を訪はんが爲めに其の居を尋ねると、ダイオジェニスは大通りを離れた所に、桶の中で轉りと横になつて大地に兩足を投げ出し、負喧しながら得々の體であつた。

ダイオジェニスは大王を始め、後からぞろ〳〵大勢の人が來るのを見た時、物臭さうに坐り直して大王をじろ〳〵と見詰めた、アレキサンダーは會釋をして偖いふには、

『ダイオジェニス、御身が智惠に就いてはいろ〳〵朕も耳にした、朕が身に出來る

ことなら何なりとする程に、遠慮なく願望を申すがよからう。」

『然らは申上げます、』

とダイオジェニスは苦もなく、

『拙者を蔭になさらぬやう、も少し側の方へお立ちを願ひます。』

此の答は大王が心中に期してゐたのと非常な相違であつたから、少なからず驚きはしたものゝ、其の無遠慮を怒らなかつたのみでなく、益〻風變はつた畸人だと稱讃した、そこで大王は馬の首を再び元來た道に向けた時、部下の者共を顧みて、

『其方共は何と言ふか知らぬが、朕が若しアレキサンターでなかつたら、タイオジェニスのやうな人になりたいと思ふ。』

三四、勇敢なる三百人

希臘全國滅亡の危機は刻々に迫つた、波斯大王の率ふる雲霞の如き大軍は荒浪の

寄するが如く東の方より迫りつゝあり、今や海岸を縫つて長蛇の如く進軍しつゝあれば、希臘の運命も此處數日の間と思はれた、波斯大王は檄を沿道の各市及び各州に飛ばし、土地及び海は既に大王の有となつた徴證として、各地の水と土とを献すべしと命じた、然るに各市及び各州の人民は、

『決して献上せず、吾人は自由の民にして外國王の命に屈從するを欲せず。』

と謂つて、破竹の勢にて進みくる大王の命令を一言の下に彈ね付けた。

茲に於て全希臘は到る處騷擾の渦中に陷つて、男子にして戰役に堪ゝ得る者は悉く武裝し、直ちに往いて大敵を追退けんが爲め雄々しくも戰爭の途に上つた、女子は家に止まつて父たり夫たり子たる人々の身を案じ、泣いて萬一の凱旋を待ちつゝ恐怖の爲めに震つてゐた。

海岸を縫つて蜒々として進軍しつゝある波斯軍は、希臘を衝かんには是非とも山と海とに狹められたる通路を採らねばならぬ、而して此の要路を防禦したのはスパ

ルタ王レオニダスで、王の下には死を恐れざる三百のスパルタの勇士、生命を鴻毛の輕きに比して敵や遲しと待ち構へてゐた。

意既に全希臘を呑んだ波斯軍は、時を移さず此處を目掛けて堂々として目睫の距離まで進んで來た、野も山も目に餘る敵兵である、如何に武勇に秀でたりとはいへ、三百のスパルタ兵は金鐵で鍛へた身體でない、何して一握の寡兵を以て雲霞の如き大軍に抗せんとするのであらうか。

然れどもレオニダス王及び三百の勇士は、此の要害を固守して一歩も讓らなかつた、彼等は阿容と此處を捨てゝ走らんよりは、此の土に尸を暴すを欲した決死の勇士である、當時波斯軍の如何に大勢であつたかは、其の雨の如く射出す矢のみでも天日を暗くしたと言傳ゐるので其の一般が分る。

敵の大軍なるを見て三百の勇士の血は益湧いた、彼等は口々に、

『大勢なればなる程戰ふ甲斐がある、生命の限り敵つて見ん、』

と決死の色は各自の面に歴然と讀まれた。

遂にスパルタ軍は峽路を遮つて立つた、寡を以て衆に面して立つたのだ、三百の勇士が胸中には恐怖の念なるものは塵程もない、後から押寄せられて波斯軍の眞先に進んだ者は、三百の槍先に貫かれて象棋倒しに斃れるのみである。

然れども寡を以て能く衆に敵すべからず、身金鐵にあらざるスパルタ人は一人々々と減つて行く、遂には幾萬の敵兵が血に塗れた彼等の槍も折られた、而も彼等は依然として要害を讓らぬのである、氣息ある者は相並んで立ち、最後の一人となる迄もと惡戰苦闘したのである、彼等の或者は劍の鞘を拂つて戰つた、或者は匕首を拔いて斬りまくつた、或者は拳を飛ばし或ひは嚙み付いて格闘した。

野火の枯草を焚くが如く、一擧して希臘を掌中に握らんと期した波斯の大軍は、健氣なる三百の寡兵に喰止められて、終日寸毫も進軍し得なかつたのである、下界の修羅場を知るや知らずや夕陽西山に春いた頃には、生きて殘るスパルタ人の一人

だになく、槍や矢を猬の如く被つた勇敢な死體が、累々として堆積せられあるのみであつた。

然れども此の忠勇義烈なるスパルタ軍の爲めに、波斯軍が失つた士卒は二万人だと註せられる、斯くして希臘は救はれたのである、外奴の版圖たる屈辱を免れたのである。

爾來星霜幾千年、歴史は變遷して往昔の面影は消滅に歸したけれど、祖國の爲めに死んだレオニダス及び三百の勇士が物語は、今も尙ほ人々が喜んで語る所である。

ソクラテスと其の家

昔希臘にソクラテスと呼ぶ賢人があつた、彼の敎を乞はんが爲め國中より集まり來る者多く、彼も亦其の乞ひに應じて色々愉快な話題を持ち出して、面白可笑しく話すのが常であつたから、聽衆も倦くを知らず喜んで耳を傾けるのであつた。

或夏のことである、ソクラテスは一軒家を建てたが其の又小さい事が非常なもので、近隣の人は彼樣な山雀の巣見たいな小さな家で、先生は能く滿足が出來ることだと驚いたから、

『如何な道理が御座りますかは存じませんが、先生程な賢いお方樣が、何故又箱のやうな山さいお住家をお建てなすたのです?』

ソクラテスは此の質問に答へて、

『其のお疑問は尤もで御座るが、是には少し子細がある、成程家は御覽の如く小さいが、それでも信實の友ばかりで充たす事が出來たなら、嘸滿足な事だらうと存じてな。』

國王と其の鷹

ジンギスカンは歴史上に雷名を轟かした國王で、又武勇の譽高き戰士であつた、

彼は支那や印度迄も兵を進め、數多の國々を征服して版圖を擴げた、彼が足蹟を印した諸國の者共は其の勇敢なる行爲に舌を捲き、アレキサンダー大王以來彼に匹敵する者はないと、只管其の武勇を驚嘆して語つたのである。

久振りで戰役から戻つた或朝のことである、王は戰塵の苦を洗はんが爲め、一日を樂しく遊獵に費さんとて森の方へ馬を進めた、澤山な知己朋友は華美に着飾つて弓矢を手に携え王の後に跟いて供をする、最後に召使共が獵犬を伴れて從がふといふ順序であつた。

一行は心のおけぬ朋友主從の間柄なので、眞に心ゆくばかり樂しい一團であつた、程なく森の奥では叫び聲や笑聲が手に取る如く聞ゐる、夕方になつたら嘸多くの獲物が運び出される事だらうと豫期された。

言落したがジンギスカン王の拳には愛飼の鷹が据ゐてあつた、といふのは其の當時は我が國の封建時代の如く、鷹野といつて鷹を狩獵に馴らすのが常であつたから

である、で、鷹は主人が一聲掛ると、空中高く飛揚して鋭どい眼で獲物を搜し、鹿でも野兎でも見付けたら最後、弦を放れた矢のやうに其の上へ舞下るのである。

王の一行は終日木立の間を此處彼處と乘り廻したが、如何いふ譯か其の日は期待した程の獲物がなかつた。

其内に遠慮なく日は暮れかゝる、森の奥はいとゝ暗くなつて來た、王は以前にも度々此の森には狩獵を試みたので、何處其處に道があるかは能く知つてゐる、で、一行の悉くは捷徑を採つて家路に向つたのにも係らず、王一人は二つの山に挾まれた谷の間を迂回りして、悠々と乘馬の手綱を搔繰つたのである。

其の日は又非常に暑かつたので、一日を狩り暮した王は瀕りに渴を覺ゐて來た、此の時王が鍾愛の鷹は拳を離れて何處へか舞つて行つた、多分御殿へ戻る道でも探しに行つたのであらう。

陣中に櫛風沐雨の苦を嘗めた王は、喉が干付くやうな渴を忍びつゝ靜かに馬の足

搔を進ませた、彼は往日狩獵の歸りに此の道を採つた時、水晶を碎ひたやうな泉を見出したのは此の邊に相違ないと、偖こそ一行より離れて迂回道を來たのである、王が若し此時滾々として湧く清い泉を見付けたなら、其の喜びは何なであつたらう、然し焚くが如き夏の日は、谷間の水を全く涸らし盡してゐるを知らなんだ。

流石の王も今は堪ゑ切れぬので、微なる星明りを便に見覺ゑある所々を隅なく搜すと、嬉しや岩根を傳つて滴り落つる水を見出した、彼は一滴の水なりともあるからは、必らず此の上流には往日の泉があるに相違ないと勇み立つた、けれども悲哉王は期節を間違へてゐる、雨期などには成程一道の水流は此邊でも常に流れてゐやう、然しながら今は夏の眞盛である、僅かに忘れたやうに時折一滴二滴、水が滲み出るばかりであつた。

一滴の水も時にとりては萬解の酒に優る、王は蘇生した思ひで馬から飛び下り、狩獵用の鞄から銀製の小洋杯を取出し、點滴を掬ひ集めんが爲めに其の下で受けて

ゐた。

塵積つて山となるとは昔の人の殘した諺である、成程幾千年を其儘に放棄しておけば、山ともならう、海も埋まらう、然しながら必要に迫つた水を此の洋杯一杯に滿すには、少なからぬ時間を要したのである、王の渴は最早待ち切れぬのであつた、それでも殆んど一杯になつたので、王は直ちに洋杯を唇にあてゝ一息に飲み乾さんとした。

此時遲く彼時早く、ヒューと空を切る音がしたと思ふ間もなく、黑い影が疾風の如く下りて來て洋杯を王の手から敲き落した、哀れや辛苦の水は無慙にも地に滲みてしまつた。

何奴なれば推參至極と、王は怒つて其の黑い影を儼と見ると、これは又意外！

日頃鍾愛する鷹であらうとは。

鷹は二三度其邊をひら〳〵と舞ひ廻つて、泉の側なる岩角に棲つたのである。

ジンギスカン王は鷹を相手に怒れもせず、再び涙程の水を掬ひ集めんが爲めに洋杯て受けてゐた、が、今度は以前程長く待つ事が出來んので、半分程の水が溜つたのを見て唇まで持つて行かうとすると、先度の無禮に懲りぬ鷹が又卒然舞ひ下りて再び洋杯を王の手から敲き落した。

王は事物を解せざる畜生とても、餘りの無禮と心中に怒りを發した、けれど渴きに渴いた王は未だ泉の側を離れるのに忍びんのである、三度洋杯を手にして點滴を溜めたが、鷹は三度防害して一滴の水も王の喉には通さなかつた。

王が憤怒は茲に至つて極に達した。

『如何なれば汝斯く迄憎むべき所業をなすや?』

と眼を血走らしながら、

『朕が拳にあれば、直ちに絞め殺して生かしおく奴でない。』

四度王は洋杯に滴り落つる水を溜めた、然し飲む前に劒の鞘を拂つて再び鷹に向

ひ、

『今度こそ最後だぞ。』

王の言葉が終るか終らないに鷹は又舞ひ下つて、四度洋杯を王の手から敲き飛ばしたけれど、王も此度こそは斯くあるべしと期したのである、矢庭に紫電の如く劒を振つて鳥に斬りつけた。

哀むべし王が手練の切先を受けて何條堪るべき、鷹は血塗れとなつて主人の足下に最後の氣息を吐いた。

『斯くなり果てたも汝が罰だ。』

とジンギスカンは言ひながら洋杯を捜しても手近にない、遙かに離れた岩と岩との間に落ちてゐて手が屆かぬ。

『兎に角源を捜して一口でも飲まねばならぬ。』

と獨語しながら、王は懸命に絶壁を攀ぢ始めた、けれども崖は思つたより嶮しい、

夜の闇は手足の自由を缺く、一歩々々足場が高くなるにつれ、王の喝は縊られるやうな苦痛を訴へるのである。

が、遂に其の水源を極めた時、嬉しや其處には千金にも換へられぬ水溜があつたので、救ひの水よとばかり近寄つて見ると、何物か其の中に一杯になつて盤曲つてゐるものがある、嗚呼、王が最前からの艱難苦勞も水の泡、水溜中の一物は巨大なる毒蛇の死體であつた。

王はハタとばかりに呆れて立上つた、而して其の瞬間に喉を締括られさうな喝も忘れ、突如として自分の足下に血塗れになつて斃れた、彼の哀れな鳥の身の上が胸に込上げて來た。

『健氣なる鷹よ！　汝は眞に朕が生命を救つた、』

と王は愁然として、

『其の再生の恩ある汝に此の朕は何を以て報ひたか、其方こそは朕が最愛の友である、其の友を無慙にも殺したのは朕ではないか。』

彼は直ちに崖を攀ぢ下りて鷹の死骸を鞄に藏め、再び馬に飛び乘つて疾風の如く王宮へと歸る道すがら、

『朕は今日こそ悲しい教訓を學んだ、爾來は一旦の憤怒に乘じて何事もせぬ。』

と獨語した。

醫師ゴールドスミス

愛耳蘭にオリバー・ゴールドスミスと呼ぶ親切な人があつた、此の人は一生涯の内に澤山面白い本を書き殘した文豪であるが、諸君も他日其の著書を讀まれる期があらうと信ずる。

彼は氣質の優しい人で、他人の難儀を見れば必らず助ける、持つてゐる物は惜氣もなく呉れてしまふといふ性質だから、貧しい者に餘り施し過ぎて、自分も平素貧

しく暮してゐたのである。

彼は又時として醫師ゴールドスミスと呼ばれる、是は彼が一度醫師たらんと欲して研究した事があるからである。

一日貧しい内儀が醫師ゴールドスミスの許に來て、先生良人が病氣で何一つ食べずに寢てゐますから、何卒御診察下されと賴んだ。

親切な醫師は早速承知して病家を見舞つて見ると、内儀さん夫婦の一家は餘程困窮の有樣で、稼人の亭主は永い間職業がなく、病氣に罹つてゐるではなくて貧乏に苦しんでゐるのであつた、そして食物といつては家中に何一つなかつた。

『では今晩宅までお出でなさい、』

とゴールドスミスは内儀さんに親切に、

『御亭主の藥をお渡しゝますから。』

其晩更けてから内儀さんは醫師の宅を訪れた、ゴールドスミスは非常に重い小さ

な紙箱を手渡して、

『此中に藥が入つてゐますよ、隨分と丁寧に服藥さすがよい、すれば御亭主の病氣は屹度愈るから、だが家へ戻る迄に箱を開けちやいけないよ。』

『あの服藥法は如何致しますので？』

『箱さへ開ければ内に書いてあるよ。』

内儀さんは戻つて亭主の側い坐り、二人で箱を開けて見ると、まあ何が入つてゐたであらうか？

内には貨幣が一杯詰つてゐて、一番上に次ぎのやうな處方箋があつた。

『必要な時に用ひよ。』

ゴールドスミスは實に彼が持つてゐた現金を殘らず與へたのである。

昔普魯士の國にフレデリック・ウキリアムと呼ぶ王があつた。

六月のある麗かな朝であつた、王は獨り郊外の綠滴る木立の間を此處其處と散歩しながら、都會の喧騒に倦んだ心神を、物靜かな自然の間に樂ますのを喜んでゐた。

そこで王は心うれしく木立の間を縫つて行きなから、可愛らしい小禽の囀る音に足を止めたり、回邊に咲き匂ふ野生の花を厭かず眺めたり、時々は菫菜、櫻草、毛茛などの優い花を摘み取つたが、直に美しい草花で兩手が一杯になつた。

暫時して王は森の眞中の唯ある小さい牧場に出た、見ると數人の子供が此處彼處と馳け廻りながら、嫩草の中に咲いてゐる九輪櫻の花を摘んで、餘念なくにこ〳〵と遊び耽つてゐた。

子供達の晴々しい罪のない顏と、其の樂しさうな淸々しい聲とは王を少なからず喜ばしめた、で、王は其の儘去るに忍びないので歩みを止め、無邪氣な遊びを熟と

見てゐた。

見てゐるばかりでは最早堪らなくなつたので、子供達を側に呼寄せ、自分も一緒になつて涼しい木蔭に坐つた、子供等は何時にも見たことのない此の紳士が、王樣であらふとは知る筈もないが、其の優しい顏と温和い樣子とで、彼等は直ぐに懷いてしまつた。

そこで王は微笑みながら、

『皆私が今から二つ三つお尋ねしますからねね、一番立派に答へられた方には御褒美を上げることにしませう。』

と言ひながら子供等に能く見ゐるやうに、御褒美の香橙を高く差し上げた。

『宜しいですか、さあ尋ねますよ、皆さんも能く御存知の通り、私共は皆普魯士王國に屬する民ですが、此の香橙は何に屬しませう、知つてゐる方は言つて御覽。』

と王が第一に質問を發すると、子供達も即座には答が出來ず、可愛らしい目をき

よろ〳〵させながら、お互ひに顔を見合つてゐたが、寸時して元氣のいゝ快活らしい一人の子が、矢庭に臆する色もなく、

『おぢさん！　香橙は植物界に屬します。』

『何故植物界に屬しますか？』

『何故といふと香橙は樹の果實なんです、そして樹は植物界に屬しますから。』

王は此の判然とした答に喜んで、

『其の通りです、能くお答が出來ました、さあ御褒美に此の香橙を上げやうね、』

と王は香橙を態と其の子供の方に投げてやり、

『さあ、受けられるなら受けて御覽！』

次に王は衣嚢から金貨を取出し、太陽の光にきら〳〵と輝かせながら、

『それでは金貨は何に屬するでせうか？』

すると此度は別の怜悧さうな子が、

『おぢさん、金貨は鑛物界に屬します、黄金ばかりではありません、金屬は皆鑛物界に屬します。』

『其の通りです、能くお答が出來ました、さあ御褒美に此の金貨を上げやうね。』

子供達は意外な御褒美に目を圓くして喜んだ、そして皆瞬きもせずに熱心な顔をして、今日始めて遇つた善いおぢさんが、次ぎには如何な質問をするだらうと待ち構へた。

すると王は益〻機嫌よく、

『それでは今一つ丈けお尋ねします、今度が一番容易いお尋ねですよ、』

と言ひながら立ち上り、

『では此の私は何に屬するでせうか、さあ皆中て丶御覽。』

怜悧な子供達もこれには弱つて、普魯士王國に屬しますと答へやうかと思つたり、或ひは動物界に屬しますと答へやうかと考へたが、それでも何だか違ひさうなので

皆王の顔を見て口を噛んでゐた。

すると連中の内で一番小さい、葡萄のやうな愛くるしい目をした一人の女の子が、王がにこ〳〵微笑んでゐる顔を見ながら、簡單に、

『おぢさんは天界に屬すと思ひます。』

フレデリック・ウキリアム王は矢庭に身を屈めて、此の可憐な女の子を抱き上げ、熱い接吻をした時には兩眼に涙が一杯溜つてゐた、そして左も嬉しさうに、

『を丶左樣であらう、左樣であらう。』

バーメサイドの饗宴

昔バーメサイドと呼ぶ金持の老人があつた、四季の花が何時でも咲き匂つてゐる花園の眞中に立派な家を建て丶住み、自分の欲するが儘に奢侈贅澤を盡してゐた。

茲に又同じ國にシャカバックと呼ぶ大層貧乏な人があつて、襤褸を身に纏つて人

の捨てた殘飯に漸やく腹を肥やしてゐたが、それでも當人は氣經な性質だけに、自分は王のやうに幸福な身だと思つてゐた。

此のシャカバックが食べる物が何一つなく、久しく餓た腹を抱へてゐた或日のことである、一つバーメサイドの家へ行つて、何か食べさして貰はふと思つた。

それで早速富者の門を訪れると、一人の召使が出て來て、

『お入りなさい、主人に事情を打明けすなつたら、何か屹度御馳走が出ませうよ。』

言はれる儘にシャカバックは家へ入り、主人バーメサイドに面會せうと美しい部屋を幾個も通つて、遂に床には軟かい絨氈を敷詰め、壁には古今の名畫を掛け、華美を盡した寢椅子などを据ゑた宏大な一室へと來た。

すると其の一室の上坐に、長い白鬚を生やして氣高い顔をした此家の主人バーメサイドが腰掛けてゐた、シャカバックは見るより早く腰を低く屈めて鄭重に揖禮した、これは貧者が富者に對する其の國の習慣なのである。

バーメサイドは少しも傲る色なく、親切に何がお望ですと問ひかけた。
シャカバックは具に自分の窮境を明かし、今日で麪包を食べぬことが二日ですと話した。
『二日も食べんでゐられるのか？』
と主人は喫驚して、
『それでは君は空腹くて死にかゝてゐるに違ひない、私の家には何でも澤山にあるから、腹一杯食べて行くが可ゝよ。』
と早速主人は傍を顧みて、
『をい給仕！　手を洗ふ水を持つてお出で、それから料理人に至急晩餐の用意をするやうに傳ゐるのだぞ。』
シャカバックは唯一飯の好意に有付かふと思つたのみで、斯くも親切に待遇せられやうとは期待してゐなかつたから、深く喜んで其の親切を謝した。

するとバーメサイドが、
『否最早禮なぞを言つて下さるな、さあ御一緒に食事に取掛る事としませう。』
そして主人公は誰か自分の手に水をかけて呉れる者があるやうに、瀬りに兩手を擦り合つて、
『さあ、君も手を洗つたが宜からう。』
と促した。
シャカバックは言はれて少なからず途方に迷つた、水を持つて來いと命ぜられた給仕もゐなければ、無論水を容れた器も水もある譯でない、それでも主人が言つた通りにしなければならぬと思つたので、バーメサイドの爲すやうに同じく手を洗ふ眞似をした。
すると主人は更に、
『さあ手が洗へましたら此方へお出で下さい、御一緒に食事を致しませう。』

パーメサイドは恰も食卓につくが如くに坐つて、燔肉を餐刀で切るが如き手付をした、で、言ふには、

『さあ、遠慮は御無用になさつて澤山召上れ、最前空腹だとのお言葉だつたから、思ふ存分お詰めなさるが宜からう。』

シャカバックは全然主人が戯謔に斯麼眞似をするのだと思つたから、自分も同じく餐刀で肉を切つて、肉叉で口へ入れて旨さうに食べる眞似を繰返してゐた、主人は更に、

『さあ手早く召上れ、私は御覽の通り手間はとりません。』

と言ひながら傍を顧みて、

『をい給仕！　蒼鷺の燔肉を持つてお出で。』

と命じておいて又シャカバックに、

『さあ君！　これは蒼鷺の胸の所ばかりの肉を燔いたのだよ、旨い積りだから肉叉

を付けて下さい、そして未だ此處に上等な糝汁も、蜂蜜も、乾葡萄も、青蜿豆も、干無花果も澤山にありますから、御存分に召上つて下さい、そして未だいろ〳〵御馳走も後からまゐります。』

シャカバックは最早空腹を以て死に垂とした、けれど修養のある人だから主人を怨らせるやうな無躾な事はせぬ、矢張相變らず餐刀や肉叉を動かす眞似をしてゐた、すると又パーメサイドが、

『羔の燔肉が來ました、失禮ですが君は斯麼旨い物を食べた事がありますか。』

『否如何致しまして、未だ是程結構な物は食べた事は御座りませぬ、實に見事な御馳走にのみ預りまして、何ともお禮の申上げやうが御座りませぬ。』

『多少なりとお氣に入りましたら、何卒腹一杯詰込んで下さい、主人としては御馳走のお氣に入つたより嬉しい事は御座りません。』

夫から食後の皿が運ばれた、これは主人が給仕に糖果と果物とを命じたからであ

る、が、同じく手眞似ばかりの御馳走たるや言ふ迄もない。

『何か別にお望みの物はありませんか？　御遠慮なく仰有つて下さい。』

とバーメサイドが尋ねると、哀れむべしシャカバックは蚊細い聲で、

『あゝ最早何にも望みの物は御座いません、隨分と澤山に戴きました。』

『では何か飲物を命じませう、給仕！　葡萄酒を持つてお出で！』

『あゝ御主人！　酒だけは御免を蒙ります、』

とシャカバックは徨忙しく、

『私は酒は飲みません、酒は禁ぜられて居りますから！』

するとバーメサイドは矢庭にシャカバックの手を緊と握つて、

『私は此の年頃貴下のやうな方を實際捜してゐたのです、さあ今からは眞似事でなく、實際に食事を致しませう。』

と言ふより早く手を鳴らして召使を呼び、晩餐の用意萬段を命じた、待つ間程なく色々の料理が運ばれて、今迄眞似事ばなりで濟ました珍味がズラリと列んだので、二人は食卓へと着いて餐刀と肉叉とを取上げた。

貧しいシャカバックは臍の緒切つて以來、未だ此くの如き美味佳肴で腹の虫を承知さした事はない、そこで食事が濟んで、食卓の上が綺麗に掃除された時バーメサイドが言ふには、

『私は貴下を思慮分別に長けた人だと思ふ、なか〳〵智惠も能く廻り、如何な事物に對しても力の及ぶ限り盡して見やうと心掛けて御座るやうだ、何卒私の家に此儘ゐて、家事向一際を取捌いて貰ひたい。』

茲に於てシャカバックはバーメサイドの家に止まり、最早二度と饑餓などゝいふ苦しい經驗は嘗めなかつたのである。

盲人と象

昔六人の盲人があつて、毎日路傍に立つて往來の人に袖乞ひをしてゐた。

彼等は日頃から、陸上の動物で一番大きな象といふ獸があるとは聞いてゐたが、扨肝腎の目がないので無論見たことはない、何とかして知りたいものだとは六人が六人ながら思つてゐるが、別段是はといふ名案も浮んで來ない、何とか能い工夫は無いものであらうか？

すると或朝のことである、一頭の象が盲人達の立つてゐる道を通つた、人々から今お前さん達の目の前を大きな動物が歩いて行くぢやないかと聞かされた彼等は、日頃からの疑念を晴らし、且つ智見を博くするのは此の時だと思つたので、飼象者に氣の毒だが暫時足を止めて貰ひ、自分達に一目見せて呉れと頼んだ。

見せて呉れと謂つても無論目で見る譯ではない、象といふ動物に手で觸つて見たら、何な獸で何な形位は分ると思つたからである。

それで第一番に象の脇腹を撫で廻した盲人の言ふには、

『分つた、分つた、俺には此の獸が悉皆分つた、象といふ奴は宛然壁のやうな奴だ。』

二番目に象の牙を撫で廻した盲人の言ふには、

『何の宛然壁のやうなものか、お前の言ふのは間違つてゐるよ、象といふ奴は圓くて滑々して端が尖つてゐて、何より宛然槍のやうな奴だ。』

三番目に象の鼻を撫で廻した盲人の言ふには、

『二人とも間違つてゐるよ、何の壁や槍のやうなものか、誰だつて一寸でも觸つて見りや、直と蛇のやうだ位は分りさうなものだに。』

四番目の盲人は兩手を伸ばして象の足を抱いて見、

『お前達は本當に盲人だぞ、象といふ奴は圓くて丈があつて、宛然樹のやうな奴だ位は判然と分る事ぢやないか。』

五番目の盲人は大層脊が高かつたので、手の届いたのは象の耳であつた。

『揃ひも揃つて何を言つてゐるのだ！　お前達の言つてる樣な物とは全く違つて、

象は宛然大きな扇のやうな奴だによ。』

六番目の盲人は、盲人の内の盲人で、象を探り當てる迄に大分暇が取れたが、遂に所もあらうに尻尾を握り當て、

『お前達はそれで本氣の沙汰かい、氣でも狂つたやうに俺は思ふよ、象を壁や、槍や、蛇や、樹や、扇のやうだなぞとは悉皆間違つてゐるよ、少しでも性根のある人が觸つて見れば、繩のやうな物だ位は分りさうなものだに。』

其時飼象者は象を曳いて行つてしまつた、六人の盲人は又終日路傍に立ち、象の形に就いて口を尖らして諍つた、彼等は自分一人が眞の象を見たと信じ切つてゐるので、各自に其の說の一致しない仲間を口を極めて罵るのである、然し立派に二つの目を持つた人でも、時によると飛んでもない見當違ひをして、馬鹿な眞似をやる事が無いとも言へん、だから强ち盲人ばかりを笑はれまい。

呆助さん

或る日お母さんが一人息子の呆助に、

母『呆助、今日は何處へ行くの。』

呆『おばさんの家へ行つて來ます。』

母『とんでもない失策を仕出來して、笑はれないやうにおしよ。』

呆『大丈夫、御心配はいりません、ちやお母さん行つて來ます。』

母『はい左樣なら。』

呆助さんはおばさんの家へまゐりまして、

呆『おばさん、お早う。』

おば『呆助さんお早う、何か今日は好い物でも持つて來てお呉れなのかい。』

呆『何にも持つて來ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。』

そこで、おばさんは一本の縫針を呆助に渡して。

おば『左樣なら呆助さん、又おいでよ。』

呆助は縫針を貰ひましたが、どうして持つて歸らうと困つて居ますと、丁度其處を乾草を澤山積んだ荷車が通りましたので、早速その乾草に針を刺し、テク〳〵車の後からついて家へ戻りました。

呆『お母さん、唯今。』

母『をゝ、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。』

呆『おばさんの家に。』

母『何か持つて行つたかい。』

呆『何にも持つて行かなかつたが、私はおばさんの家から持つて來たの。』

母『おばさんは何をお呉れだつたい。』

呆『縫針を一本呉れたのだけれど、道で失くしてしまつたの。』

母『お前その針をどうして持つて歸つたの。』

呆『荷車に山ほど積んだ乾草に刺して來たの。』

母『そんな馬鹿がありますか、袖口へでも刺して來れば、失くしたくても失くせないのに。』

呆『あゝわかつた、今度から氣を付けますよ。』

或る日又お母さんが呆助に、

母『呆助、今日は何處へ行くの。』

呆『おばさんの家へ行つて來ます。』

母『とんでもない失策を仕出來して、笑はれないやうにおしよ。』

呆『大丈夫、御心配はいりません、ちやお母さん行つて來ます。』

母『はい左樣なら。』

呆助さんはおばさんの家へまゐりまして、
呆『おばさん、お早う。』
おば『呆助さんお早う、何か今日は好い物でも持つて來てお呉れなのかい。』
呆『何にも持つて來ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。』
そこで、おばさんは一挺の小刀を呆助に渡して、
おば『左樣なら呆助さん、又おいでよ。』
呆助は早速小刀を袖口に突刺して、得意になつて家へ戻りました。
呆『お母さん、唯今。』
母『をゝ、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。』
呆『おばさんの家に。』
母『何か持つて行つたかい。』
呆『何にも持つて行かなかつたが、私はおばさんの家から持つて來たの。』

母『おばさんは何をお呉れだつたい。』
呆『小刀を一挺呉れたの、だけれど道で失くしてしまつたの。』
母『お前その小刀をどうして持つて歸つたの。』
呆『袖口の所へ突刺して。』
母『そんな馬鹿がありますか、衣嚢へでも入れて來れば、失くしたくても失くせられないのに。』
呆『あゝわかつた、今度から氣を付けますよ。』
或る日又お母さんが呆助に、
母『呆助、今日は何處へ行くの。』
呆『おばさんの家へ行つて來ます。』
母『とんでもない失策を仕出來して、笑はれないやうにおしよ。』
呆『大丈夫、御心配はいりません、ぢやお母さん行つて來ます。』

母『はい左様なら。』
呆助さんはおばさんの家へまゐりまして、
呆『おばさん、お早う。』
おば『呆助さんお早う、何か今日は好い物でも持つて來てお呉れなのかい。』
呆『何にも持つて來ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。』
そこで、おばさんは一疋の生れたばつかりの山羊を呆助に渡して、
おば『左様なら呆助さん、又おいでよ。』
呆助は早速小山羊の四足を一緒に縛つて、無理無體に衣嚢へ捩込みましたから、
家へ戻つたら山羊の仔は、息が詰まつて死んで居ました。
呆『お母さん、唯今。』
母『をゝ、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。』
呆『おばさんの家に。』

母『何か持つて行つたかい。』
呆『何にも持つて行かなかつたが、私はおばさんの家から持つて來たの。』
母『おばさんは何をお呉れだつたい。』
呆『生はたばつかりの山羊を一疋呉れたの、だけれど道で死んでしまつたの。』
母『お前その小山羊をどうして持つて歸つたの。』
呆『衣嚢の内へ入れて。』
母『そんな馬鹿がありますか、頸へ縄を縛つて伴れて來れば、殺したくても死なゝいのに。』
呆『あゝわかつた、今度から氣をつけますよ。』
或る日又お母さんが呆助に、
母『呆助、今日は何處へ行くの。』
呆『おばさんの家へ行つて來ます。』

母『とんでもない失策を仕出來して、笑はれないやうにおしよ。』
呆『大丈夫、御心配はいりません、ぢやお母さん行つて來ます。』
母『はい左樣なら。』
呆助さんはおばさんの家へまゐりまして、
呆『おばさん、お早う。』
おば『呆助さんお早う、何か今日は好い物でも持つて來てお呉れなのかい。』
呆『何にも持つて來ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。』
そこで、おばさんは鹽漬の豚肉を一切呆助に渡して、
おば『左樣なら呆助さん、又おいでよ。』
呆助は早速豚肉を繩で括げてずる〳〵引摺つて歸りますと、野良犬がその後からついて來て、これは御馳走樣とも何ともいはずに喰べてしまひましたから、家へ戻つて見たら繩切が手に殘つて居るばかりでした。

呆『お母さん、唯今。』
母『をゝ、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。』
呆『おばさんの家に。』
母『何か持つて行つたかい。』
呆『何にも持つて行かなかつたが、私はおばさんの家から持つて來たの。』
母『おばさんは何をお呉れだつたい。』
呆『鹽豚を一切呉れたの、だけれど道で犬に喰はれてしまつたの。』
母『お前その鹽豚をどうして持つて歸つたの。』
呆『繩で括げて引摺つて。』
母『そんな馬鹿がありますか、頭の上へ載せて來れば、犬に食べられたくても食べられないのに。』
呆『あゝわかつた、今度から氣をつけますよ。』

或る日又お母さんが呆助に、
母『呆助、今日は何處へ行くの。』
呆『おばさんの家へ行つて來ます。』
母『とんでもない失策を仕出來して、笑はれないやうにおしよ。』
呆『大丈夫、御心配はいりません、ちやお母さん行つて來ます。』
母『はい左樣なら。』
呆助さんはおばさんの家へまゐりまして。
呆『おばさん、お早う。』
おば『呆助さん、お早う何か今日は好い物でも持つて來てお呉れなのかい。』
呆『何にも持つて來ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。』
そこで、おばさんは犢を一疋呆助に渡して、
おば『左樣なら呆助さん、又おいでよ。』

呆助は早速犢の重いのを耐へて頭の上に載せ、汗をたら〳〵滴しながら歸りますと、犢は呆助の頭や顏を一面に引搔いて傷だらけにしました。
呆『お母さん、唯今。』
母『をゝ、呆助戻つたかい、ぞして今迄何處に居たんだい。』
呆『おばさんの家に。』
母『何か持つて行つたかい。』
呆『何にも持つて行かなかつたが、私はおばさんの家から持つて來たの。』
母『おばさんは何をお呉れだつたい。』
呆『犢を一疋呉れたの。』
母『お前その犢をどうして持つて歸つたの。』
呆『頭の上へ載せて來たら、こんなに引搔ゝれて傷だらけにされたの。』
母『そんな馬鹿がありますか、秣槽に括りつけて槽ともに引摺つて來れば、引搔ゝ

れたくても引掻〻れないのに。』

呆『あゝわかつた、今度から氣をつけますよ。』

或る日又お母さんが呆助に、

母『呆助、今日は何處へ行くの。』

呆『おばさんの家へ行つて來ます。』

母『とんでもない失策を仕出來して、笑はれないやうにおしよ。』

呆『大丈夫、御心配はいりません、ぢやお母さん行つて來ます。』

母『はい左樣なら。』

呆助さんはおばさんの家へまゐりまして。

呆『おばさん、お早う。』

おば『呆助さんお早う、何か今日は好い物でも持つて來てお呉れなのか。』

呆『何にも持つて來ないの、何かおばさんに貰はうと思つて。』

そこで、おばさんは、

おば『今日は何にもあげる物がないから、私を連れて行つてお呉れよ。』

呆助は早速おばさんの首を繩で縛り、秣槽に括りつけてごろ〳〵戻つて來ました

呆『お母さん、唯今。』

母『をゝ、呆助戻つたかい、そして今迄何處に居たんだい。』

呆『おばさんの家に。』

母『何か持つて行つたかい。』

呆『何にも持つて行かないの。』

母『おばさんは何をお呉れだつたい。』

呆『何にも呉れないの、だが今日はおばさんが來たの。』

母『をゝさうか、そしておばさんのお供をして來たらうね。』

母『お供をして來ましたとも、おばさんの首を繩で縛つて、秣槽に括りつけて、力

一ぱい忌嫌るのを引張つて來ましたゞもの。』

戸の外で聞いて居たおばさんも、到頭ぷん〳〵に怒つてしまひ、二度と呆助を自分の家へよせつけませんでした。

〔解説〕こんな馬鹿者も澤山ありますまいが、總て海綿が水を吸つて吐き出すやうに、智惠も教はつたまゝ吐き出して、應用するといふことがなくては駄目です、昔から賢い人のことを、一を聞いて十を知るといふ如く、一つの智惠を何にでも應用することを心掛けねばなりません。

蜘蛛と蚤

蜘蛛と蚤とが一緒に住んで居ましたが、雞卵の殼にお旨しいお酒を釀して、何よりの樂みとしてゐました。

或る日蜘蛛が雞卵の殼に這ひ上つて、お酒を造らうとサッサと働いて居ましたが、

何ういふ機勢か足を滑らして轉り落ち、大火傷を致しました。蚤はお友達の災難を見ておい〳〵大聲で泣いて居ますと、側に立つて居た雨戸が、『蚤さん、何をそんなに悲しさうに泣くんだい』と尋ねましたから、蚤は泣顔を上げて、『お友達の蜘蛛が大火傷したんだもの、これが泣かずに居られますものか』と泣きしやくる有樣。

雨戸も聞いて急に悲くなり、軋々と泣いて居ますと、隅に凭れて居た箒が、『雨戸さん、何をそんなに軋むんだい』と尋ねましたから、雨戸は

小さな蜘蛛が火傷して
蚤はおい〳〵泣き出すし

とうたひながら、『これが軋まずに居られますものか』と答へました。

箒も聞いて急に悲くなり、がさ〳〵音をさして泣いて居ますと、其處を通り過ぎた小さな荷車が、『箒さん、何をそんなにがさ〳〵音を立てるんだい』と尋ねましたから、箒は

小さな蜘蛛が火傷して
蚤はおい〳〵泣き出すし
雨戸は軋々動き出す

とうたひながら、『これがガさ〳〵せずに居られますものか』と答へました。

荷車も聞いて急に悲くなり、貰泣きに轟々廻つて泣いて居ますと、側に堆く積んであつた灰が、『荷車さん、何をそんなに轟々廻つて居るんだい』と尋ねましたから、荷車は

小さな蜘蛛が火傷して
蚤はおい〳〵泣き出すし
雨戸は軋々動き出し
箒はがさ〳〵音を立つ

とうたひながら、『これが轟々廻らんで居られますものか』と答へました。

灰も聞いて急に悲くなり、バッと一時に燃え出しますと、其處に植えてあつた樹が、『灰さん、何をそんなにバッと燃え出すんだい』と尋ねましたから、灰は

小さな蜘蛛が火傷して
蚤はおい〳〵泣き出すし
雨戸は軋々動き出し
箒はがさ〳〵音を立て
車は轟々廻り出す

とうたひながら、『これがバッと燃えんで居られますものか』と答へました。

樹も聞いて急に悲くなり、ぶる〳〵と幹を震はして葉を振り落して居ますと、壺を持つて水を汲みに出た小娘が、『樹さん、何をそんなにぶる〳〵幹を震はして葉を落すんだい』と尋ねましたから、樹は、

小さな蜘蛛が火傷して

蚤はおい〳〵泣き出すし
雨戸は軋々動き出し
箒はがさ〳〵音を立て
車は轟々廻り出し
灰は一時にパッと燃ゆ

とうたひながら、『これがぶる〳〵震はずに居られますものか』と答へました。

小娘も聞いて急に悲くなり、手に持つて居た壺をいきなり地に投付けて碎いてしまひますと、小娘が水を汲まふとした小河が、『お嬢さん、何をそんなに短氣に壺を碎くんです』と尋ねましたから、小娘は、

小さな蜘蛛が火傷して
蚤はおい〳〵泣き出すし
雨戸は軋々動き出し

箒はがさ〳〵音を立て
車は轟々廻り出し
灰は一時にパッと燃え
樹はぶる〳〵と葉を振り落す
こんどは私の番なのよ

とうたひながら、『これが壺なんか碎かないで居られるものか』と答へました。

小河は聞いて『あゝ』と溜息をつき、『私もセッセと渦を卷ねば居られません』といひながら、ぐる〳〵輪のやうに廻るに從がい、追々水勢は強くなり、水嵩は段々と增して來て、見る〳〵内に蠶が桑の葉でも食べるやうに、小娘も、樹も、灰も、荷車も、箒も、雨戸も、蚤も、蜘蛛も沈んでいつて、到頭一面の水になつてしまひました。

〔解説〕よく赤坊が自分は上機嫌で居ても、他の兒が泣くのを見ておい〳〵と貰泣き

三、征服者ウヰリヤム王の王子

今は昔、英國に征服者ウヰリヤム王――佛國から海を渡つて英國を征服した王なので、征服者なる名を冠せしめる――なる名主があつて、三人の王子の父であつた。

一日王は鬱ぎ込んで、憂慮に堪へぬといつた顔で、物思ひに沈んでゐた、お側に侍る人々は如何なる大事件が起つて、王は斯くも御氣色勝れさせ給はぬかを尋ねた時、王は熱い太息をホッと吐いて、

『否、別段事件が起つたのではない、朕が亡き後の王子等が身を考へて、つい物思ひに深入りしたのぢや、彼等が人並勝れて賢くて、武勇も群を抜んでゝゐれば格別、それでなくば、折角子孫の爲めと辛酸を嘗めて得た國土も、人手に渡るは明かな道理、して又朕が永眠の後、三人の何の子が王位に即くのやら、一人で判斷に苦しんでゐるのぢや。』

と胸の曇を打明け給へば、侍臣等は恭々しく、

『陛下、其の御宸念もさることながら、臣等が考へますには、王子達の最も好ませ給ふ御趣向の程を知るを得ば、恐れながら其のお人柄も略窺ひ得られます、それにはお三方に唯一二の御質問さえすれば、陛下百歳の後王位に即かせられ、此の國土を知ろし召すに最も相應はしきは何の方なるやは、臣等にも察し得らるゝ事と存じます。』

『尤もぢや、其の議誠にしかるべし、』

と王も心を取直し、

『早速三人の王子を此處に呼で呉れい、そして其方達が思ふ通りに質問して見よ！』

侍臣等はお三方を一時に呼ぶべきか、それとも一人〳〵呼ぶべきかと少時熟議したが、やがて相談一決して、王子方を一人づゝお呼び申し、同一の質問を申し上げる事となつた。

第一に王の御座所に呼ばれたのは、長子のロバートと言ふ丈の高い、片意地で強情な王子であつた。

『若君様、何卒私共の問ひにお答へ下され、』

と侍臣の一人が口を開いて、

『若し神様のお思召が、若君様を鳥に化さるのが御意に叶ふと致しましたら、何んな鳥をお撰みで御座りまするか？』

鷹よ、』

ロバートは苦もなく質問に答へて、

『僕は鷹が好いや、何んな鳥だつて鷹のやうに、勇ましくつて立派な武士らしい鳥は無いんだもの！』

次に呼ばれたのは次子のウキリアムといつて、父王と同じ名前だけに、父の鍾愛の最も深い少年で、暢々した快活な圓顔で、鬚の赤い見るからに愛くるしい少年で

あつた。

『若君様、何卒私共の問ひにお答へ下され、』

と侍臣の一人が、又同一の質問を操返へして、

『若し神様のお思召が、若君様を鳥に化さるのが御意に叶ふと致しましたら、何んな鳥をお撰みで御座りまするか？』

『鷲よ、』

とウキリアムは直ぐと質問に答へて、

『僕は鷲が好いや、鷲は一番強くて豪氣で、何んな鳥にも恐ろしがられて、鳥の内での王様だもの！』

最後に呼ばれたのは、三人の内で一番年少のヘンリーといつて、沈著な歩態で、謹み深い、思慮に富んだ顔付で入つて來た、彼は兼てより讀書習字の道にも長けた少年であつた。

『若君様、何卒私共の問ひにお答へ下され、』
と侍臣の一人が、同一の質問を三度操返へして、
『若し神様のお思召が、若君様を鳥に化さるのが御意に叶ふと致しましたら、何んな鳥をお撰みで御座りまするか？』
『掠鳥よ、』
とヘンリーは譯もなく答へて、
『僕は掠鳥が好いや、掠鳥は樣子だつて柔和くつて、人を喜ばせる許でなく、近所隣から物を掠めたり、無暗に他を虐めたりしないんだもの！』
茲に於て侍臣等は額を鳩めて凝議したが、少時して何事か決する所があつたと見ゐ、王に恭々しく奏上するには、
『恐れながら臣等の考へます所によりますれば、御總領のロバート君は、御成人の後は豪氣膽大の傑物に成られ、世に目覺しき大業をお建てになり、盛名を知らる

ゝお身とを成り遊ばすに相違は御座りせませねど、怨むらくは晩年敵の爲めに征服せられ、牢獄の内に最後を遂げ給ふで御座りませう、』
と一寸葉言を切つて、
次ぎにウキリアム君は、鷲の如く敢爲にして、豪勇無雙にお成人なされます、然れども兎角殘忍猛惡の振舞多きが爲めた、世に怖ぢ憎まれさせ給ひ、一生を非義非道に送られ、辱多き死を遂げらるゝことゝ存じます、』
と又一息ついて、
御末子ヘンリー君は、お年を召すに從ひ、益々御智慮の程も深くなり、謹嚴愼重で、温厚篤實の方とお成り遊ばすに相違は御座りません、されば敵に推寄せられて、萬止むなきの場合にあらざれば軍を動かされまじく、隨つて内には敬愛を受け給ひ、外よりは尊重せられ給ひ、多くの領土を平和の間に獲得せられ、四民哀悼の内に靜穩なる臨終を遂げ給ふと存じます。』

星移り物變はりて、侍臣等が豫言の事も幾年の昔となり、三人の王子は健に成人した、さしものウキリアム王も寄る年波には勝たれず、臨終の床に横はる身となつた、で、王は病苦を堪ね、再び自分が亡き後の三子の事を胸に浮べ、其の昔侍臣等が語つた事を想ひ出し、長子ロバートには佛蘭西に有する領土を與へ、次子ウキリアムをして英國に王たらしめ、そして末子のヘンリーには一寸の土地も與へず、只筐の黄金を取らせよと宣言した。

一光陰に關守なく、それから又幾年は夢の如く過ぎ、遂に侍臣等が豫言の的中する時が來た。

ロバートは己が欲する鷹の如く、齡を重ぬるに從つて、徒らに膽大にして小節を顧みず、血氣に逸る猪武者となり、父王が殘した佛蘭西の領土を失ふのみでなく、死する迄牢獄内に呻吟する身となつた。

ウキリアムは一度英王の位に即くと、壓制暴虐至らざるなしといふ有樣で、民の

恐怖すること甚しく、心ある者は彼の肉を喰はんと迄怨んだ、で彼は一生を邪惡の内に送つた末、一日森に狩した時、自分の近臣の爲めに弑せられた。

最後に末子のヘンリーは、件の金筐を大切に所持してゐた許でなく、間もなく英國の王位に即き、兄が失つた佛蘭西の領土をも、再び支配する明主となつた。

白船

征服者ウキリアムの三子で、英國の位に即いたヘンリー王には、父と同名のウキリアムと呼ぶ、大層寵愛して片時も措かぬ王子があつた、王子は流石名門の生れだけに、氣品も高し勇氣もあるので、何人も此の王子こそ父王の後を繼ぎ、全英國を統治する明主とならるゝであらうと思はぬはなかつた。

或年の夏である、王子ウキリアムは父王に連れられ、佛蘭西なる領土視察の爲め海を越ねて旅をした、海路恙無くやがて彼の土に着くと、四民が喜悅に滿ちた熱心

なる歡迎は受ける、王子は其の態度が如何にも健氣で閑雅だと、見る者悉く眞心から愛を捧げるといふ有樣なので、父王の滿足は何に譬へる物もない。

けれど再び英國に歸るべき時が來た、父王は凌晨の頃船を艤せしめ、數名の賢臣勇士と共に、未だ明切らぬ暗を破つて出帆せられた、けれど王子ウキリアムは、今度の佛蘭西旅行が如何にも樂しかつたので、父王と共に纜を解くに忍びなかつた、で、本國から伴れて來た同じ年頃の學友達と、今暫し出發を見合せる事にした。

待たぬに時間は程なく來て、王子の一行も又忘れ難き地に袂別の情を殘し、英國を指して船中の人となつた、其の船は白帆に白檣の美しいので、王子が此の航海の爲めに、父王の特に意を用ひて艤裝せしめたのであつた。

海上は眠るが如き穩かさで、名も知らぬ鳥が悠々と浮いてゐる、颯々と吹く風は衣の袖を輕く撫でる、誰一人として危險が襲ひ來らうなどゝ思ふ者はなかつた、船中には小さき王子が旅情を慰めんが爲めに、種々の娯樂が思ふさま出來るやうにし

てあつた、やがて劉喨たる音樂が始まる、氣持のいゝ舞踊の足音は聞ゐる、皆は欣然として愉快に遊んでゐた。

純白な翼を張つた王子の船が、未だ佛蘭西の灣を出離れぬ前に、夕日は赤々と波を染めて地平線下に沈んでしまつた、けれど、此の疊のやうに穩かな海で、英國は目と鼻との間である、日が暮れたとて何程の事があらうか、眞晝を欺く月は大きく中天に輝やいてゐる、明日は曉前に海狹を横切る事が出來やうと安心したので、無邪氣な王子は言ふ迄もなく、供奉の者共も氣を暢々とさせ、祝宴を開いて面白可笑しく打興じた。

銀盤のやうな月影が波間に隱れて、人々は宵の騷ぎに疲れてか、暖かき夢を結んだ眞夜中の事である、突然甲板に喧嘩しい叫聲がした、それつ、と言ふ暇もなく、艫の方で落雷のやうな物の碎くる音！船を暗礁に乘り上げたのだ、忽ちにして潮は凄じい勢ひで流れ込む、船は見る間に沈んで行く、嗚呼、宵の內歡樂を盡した供奉

の者共は今は何處、定め難いはあながち船のみの運命ではない！

刻々に沈みゆく船と運命を共にする人々は、恐怖と絶望との念に驅られて爲す可き手段も分らん、我々が身は斯くて底の藻屑とならばなれ、大切なる王子を魚腹に葬つてはと思付いた二三の屈强な武士は、巨人の如く流れ込む潮を物ともせず、漸く一艘の端艇を下ろし、王子を抱いて跳び乘つた、彼等が滿身の力を籠め、橈を一漕ぎして後を見かへつた時、今迄歡樂の場たりし親船は、永遠の別離を述ぶるものゝ如く、全く水を被つて底へと沈み始めた、さても木の葉に似たる小さき一艘の端艇は、乘組の生命を安全に搬ぶてあらうか？

や端艇は今や波間を扳けつ潛りつ、勇士が鐵の如き腕に漕れて橈の柏子も雄々しく、ものゝ五間も離れたと思つた時、僅かに水面に船體を殘す親船の中から、絹を裂くやうな悲凄の聲を絞つて、助けを叫ぶのか聞えた。

『漕ぎ戻せ、端艇を親船に漕ぎ戻せ』

と、王子ウキリアムは決然たる顏に恐怖の色を浮べず、

『妹の聲ぢやぞ、片時も早く助けて遣はせ！』

武士等は再び短艇を親船に漕ぎ戻すのは、好んで死地に入るのだとは知らぬでもなかつたが、幼い王子が妹を思ふ眞情を察しては、能う否まうとする氣は出なかつた、で、端艇は再び水面に舷のみを殘した親船に漕ぎ戻された、我が身の危きを忘れて、優しき友愛の情に燃ゆた王子は直ぐと起上り、其處に泣いて救ひを求むる可憐の妹を抱かうと、兩腕を差伸ばしたが……噫、萬事休す、忽ち舷がぐらりと一方に傾いて、波間に腸を絞るやうな斷末魔の一聲、後は天地寂寞、只呑ぶが如き波の響き。

親船に端艇、王子に王女、扨は佛蘭西を出た綺羅星の如き供奉の面々宵の間の夢と消ゆて、今は魚腹に葬られたのやら、船體に打ち付けられて微塵になつたのやら、程なく凌晨の空は東よりほの〴〵と明けて、千古の秘密を包む海の面には何物

の影もない、唯一人あり、板子一枚に縋り付いて漂ふ内、不思議の生命を翌日英國の海邊に流れついた、此の男の外、又生きて此の悲酸の出來事を語る者はなかつたのである。

掌中の珠と愛でた王子が最後を耳にした時の、ヘンリー王が嘆きは何なであつたらう、王は身も世もなく愁ひ悲しんで、一時は喪神した人のやうであつた、王が餘生は財寶に權勢に、昨日と變つた事はなかつたが、眞の喜悅は再び味ふことの出來ぬ人となつた、そして近侍の人々は無論のこと、其後王の笑顔を見た者は一人もないとの事である。

國王ジョンと僧院長

（其の一、　三つの質問）

昔て英國にジョンと呼ぶ王があつた、彼は形の如き暴君で、民に對すること峻嚴

刻薄、已が意に叶ふ以上は、民が泣かうが苦しまうが構はぬと言つた風、極惡非道なること古往近來、是程の暴君は英國の歷史に見たことがない。

當時現今のカンタベリーの町に、富裕の一老僧院長があつて、魏々たる宏大な僧院を構へ、目覺める程豪奢な生活を營んでゐた、日々正餐の饗膳に着く貴族一百人、侍ふ勇士五十人、何れも綺羅を盡した天鵞絨の外套に、金の鎖繻絆といふ服裝。

國王ジョンは、僧院長が奢侈驕慢の一般を耳にした時、一國の王を無視したる無禮の振舞、斯くて我が權威を輕んずる者出で來らば由々しき大事、早速賣僧奴に思ひ知らせてやらんと覺悟した、で、王は使を老僧院長の許に遣り、直ちに出頭拜謁せよと命を下した。

僧院長は他ならぬ王の嚴命に無　據、早速御殿に參上した時、

『僧院長、老體の參上滿足に思ふぞ、』

と王は眞綿で頸をしめるやうに、

『貴僧は朕よりも遙かに宏大な家に住まふさうぢやが、如何すりや其樣な虫のいゝ眞似が出來るのぢや？　無智盲昧な輩ならばいざ知らず、僧侶ともあらう者が、此の國土に住居致すからは、國王以上に奢侈贅澤な生活の出來ぬ事位は、よもや知らぬ筈もあるまい、又朕も其方に許した覺ゑはないぞ。』

『恐れながら王樣に申上げます、』

と僧院長は恭々しく、

『お言葉は一々御尤もに存じますれど、愚僧は未だ嘗て自分の所有物以外に、何一つ消費しては居りませぬ、仰ぎ願はくば陛下が仁慈なる御心にて、愚僧が幾多の友の爲めに、或ひは勇敢なる武士の爲めに、自分の財を費して歡を盡しましても、惡しからずお考への程を望ましく存じます。』

『惡しからず思ふなと？』

王は憤然として、

『惡しからず思はひで居られると思ふか？　此の廣い國土にある凡ての物は、當然の權利に依つて皆朕の所有ぢや、其方は國王以上に奢侈贅澤な生活をして、此の朕に耻辱を加へやうの所存ぢやな？　其方が朕の位を覗ふ反逆者ぢやと言ふ者があつても、左右の言譯はよもや出來まい。』

『何と仰せられます！　愚僧は……。』

『默れ！』

とジョン王は大喝して、

『如何に辨口を以て遁辭を設くれはとて、其方に罪科のあるは明かぢや、今から朕が其方に三つの質問を課する程に、首尾能く答へらるればよし、答へられざる其の時は、其方の首が胴を離るゝは無論のこと、財産は悉く沒收する程に、心を落着けて返答せよ！』

『然らば其の三つの御質問とやら、愚僧及ばずながらお答へ致すで御座りませう。』

と僧院長は、泣く子と地頭の譬の通り、横紙でも裂く暴君には問答無益と思つたので、生命を亡きものと覺悟してお受けした。

『然らば早速質問に及ばう、』

と王は憎氣に冷笑して、

『第一に朕は其方も見る如く、金冠を戴いて勅う座つてゐるものゝ、何時迄壽命があることやら、何年何月幾日迄と、日まで細かに申述べよ、第二に朕は幾日を費したら、全世界を馬蹄にかけて一巡することが出來やうか、最後の質問は他でもない、朕は今何を考へてゐるか、其方に誤らず申てよと言ふのだ。』

『王樣！』

と僧院長は決心の色を面に浮べて、

『恐れながら三つとも餘程の難問に御座りますれば、今此の場にては御即答致し兼ねます、なれど、お慈悲を以て二週間の御猶豫を下し置かれますれば、愚僧が有

り丈けの智囊を絞つて、お答へ申す積りで御座ります。』

『然らば、二週間の猶豫は汪げて許し遣はす、』

と王は二週間は愚か幾百年經つとても、神ならぬ者の解き得べき質問でない、結句老僧の生命と財産は無きものと思ひつゝ、

『が、二週間の後返答が出來ぬとあらば、前にも申した通り其方が其の白髮首と、凡ての土地財産は朕が所有ぢやぞ！』

僧院長は恐れ且つ悲みて御殿を退り、早速オックスフォド大學に馬を驅つた、そして其校の敎授に賢こき人を搜しあてゝ、敎へを請はうと思つた、が、敎授連は皆頭を横に揮つて、ジョン王に關する事柄は、何も書物に出てゐない旨を答へて相談に應ぜなかつた。

僧院長は賴む木蔭に雨が漏る心地し、今度はケンブリッヂ大學を訪ひて、同じく敎授連に智惠を借らうとしたが、此授の敎授連も同じく老僧を助くる事をし得なか

つた。

今は百計盡きたる僧院長は、悄々と馬の首を家路の方に廻し、自分の幾多の友と勇敢な武士等に永遠の袂別を告げんが爲め、屠所の羊のそれの如く足搔を進めた、言ふ迄もなく彼が生命は二週間よりないのである。

（其の二、　三つの解答）

悄然と馬の足搔を進ませた僧院長は、やがて自分の家に行く道筋の小路に差掛つた時、野良へ向ふ牧羊者に出會つた。

『お歸りで御座りまするか、旦那樣！』

と牧羊者は鄭寧に挨拶して、

『して王樣の御用は何で御座りましたか？』

『何ともはや悲しい御用ぢやつた。』

と僧院長は憂れはしげに、都の一伍一什を細かに語つて聞かせた。

『旦那樣！　落膽なされますな、元氣をお出しなされませ、』

と牧羊者は事もなげに、

『馬鹿も賢人に智惠を貸すことが出來るとかいふ、世の諺を御存知御座りませぬか、手前旦那樣の御難儀が救はれるやうに思ひまする。』

『エッ、愚僧を助ける事が出來ると申すか？』

と僧院長は思はず叫んで、

『如何してぢや？　如何いふ手段でぢや？』

『さあ其の事で御座りまする、旦那樣も兼ねて御承知の通り、近所の者が私を旦那樣と酷似ぢやと申しまして、折々間違へられまする時も御座ります、で、旦那樣のお馬とお召物とで身を俏し、お供の方をお借りさゐしますれば、手前は都に上つて王樣にお目通り致します、そして萬一事が不首尾に終りましたら、何の事は御座りませぬ、手前が旦那樣のお身代りに死ぬ迄で御座りまる。』

『あゝ有難い！』
と僧院長は世にも頼もしげに、
『其方の親切は心から忘れぬぞ、では一つの厄介になる事としやう、ぢやが若し事が敗れたとて、何故其方一人を死なせて宜いものか、愚僧が早速名乗り出て死にまするぞ。』
そこで、牧羊者は直ちに都へ上る事にし、注意萬段抜目なく出立ち、自分の着物の上に老僧の長い上衣を纏ひ、帽子も杖も借りて身仕度が出來上つた時には、似たも似たり宛然瓜二つ、誰とて上人様と思はぬ者はなかつた、そこで彼は悠々と馬に跨がり、大勢の供を召連れて都へ上つた。
元より王は牧羊者だと知る譯がない。
『やつて來たの！　早速の歸來近頃過分に思ふぞよ、ぢやが幾等早うても、三つの質問に答へられずば、其の笠の臺が宙に飛ぶのは承知であらうな。』

『いや最早悉皆お答が出來るで御座ります。』
『成程！　成程！』
と王は心の内で笑ひながら、
『では第一の質問に答へて見い！　朕が壽命は何時までぢや？　日まで細かに申立てろ。』
『陛下の御壽命は……』
と牧羊者は眞面目な顔で、
『御崩御になる其の日までは確かで御座ります、最早其より一日も御壽命は御座りません、して、陛下が最後の氣息を斯世からお引取り遊ばす時に、御崩御になりまするので、決して一瞬間たりとも其より早くは御座りませぬ。』
流石の暴君も、牧羊者が當意即妙の答へにから〳〵と笑つた、
『其方は餘程の頓才が利く奴ぢや、ぢやが、第一の質問は先づ其で可いとして、正

しい解答と負けて遣はさう、扨次ぎは第二の質問ぢや、朕は幾日を費したら、全世界を馬蹄にかけて一巡することが出來やうの？』

『それには、陛下が太陽と御一緒にお起きにならねばなりませぬ、そして翌朝又太陽が出まする迄、共々お馬をお駈けなすつたら、二十四時間で世界一週をなすつたとお氣が着かれませう。』

王は再び笑つて言つた、

『成程、二十四時間で出來る道理ぢや、斯うもすら〳〵と答が出來やうとは、朕も今が今迄思はなかつた、其方は頓智が利くばかりか、なか〳〵の悧巧者だぞ、第二の質問も其で可いとして、扨第三ぢや、朕は今何を考へてゐるのか？』

『其は何でもない御質問で御座りまする、陛下は手前をカンタベリーの僧院長だと今の今お考へで御座ります、ところが正直を申上げますれば、手前は賤しい牧羊者で、今日はお上人様の爲め、二つには手前の爲め、御赦免を願ひに參上致した

次第で御座ります。』

と言ふより早く、彼は纏つてゐた老僧の長い上衣を脱ぎ捨てた。

王は腹を抱へて笑ひ崩れた。

『其方はなか〳〵面白い奴ぢやぞ、旦那の代はりにカンタベリーの僧院長になるが宜い。』

『王樣、其ばかりは駄目で御座ります、』

と牧羊者は正直に、

『手前には讀み書きが出來ませんから。』

『左樣か、それでは今日の面白い諧謔の禮に、何か他の品を取らせる事として、其方が存命中は、毎週銀貨を四枚づゝ下賜するとしやう、そして其方が家に戻つたら、彼の老僧院長に、勝手にせよと王のジョンが許したと傳へても宜しい。』

慾野深助君

雄雞と雌雞が二羽揃つて、赤塗り、四輪の車に乘り、四疋の鼷鼠にひかせて出掛けました、

ものゝ二三丁も來たかと思ふ頃、一疋の猫が向ふからやつて來て、『これはお二人大層めかしこんで何方へおこしです』と尋ねますから、『今日は慾野さんのお宅にちと用がありまして』と申しますと、猫も一緒に伴れて行つて呉れと頼みますから、雞も快く承知して車に乘せてやりました。

猶ほも道を急ぎますと、砥石やら、卵やら、家鴨やら、留針やら、縫針に出遇ひましたが、みんな一緒に伴れて行つて呉れと頼みますので、氣のいゝ雞は『をい宜し、』『をい宜し』と乘せましたから、小さい車の内は宛然芋でも洗ふやうに、ごたごた身動きも出來ん程乘り合つて行きました。

程なく慾野の家までまゐりますると、主の深助は留守でしたから、これ幸ひと鼷鼠は車を引いて納屋に隱れ、二羽の雞は梁の上に、猫は竈に、家鴨は水瓶に、卵は手拭の中に、留針は椅褥の中に、縫針は枕の中に、砥石は戸の上に、各々氣息を殺してソッと潜んで居りました。

やがて此家の主慾野深助君は、をゝ寒い〳〵と震へながら歸つて來て、早速火でもおこさうと竈の中へ顔を突込みますと、猫が不意に灰を眼に投りましたので、アッと喫驚仰天して、目目滅法に臺所へ行つて水瓶で眼を洗はうとすると、家鴨が勢ひよくバチャリと水を頭からかぶせました。

二度の不意擊に度を失つた慾助は、急いで顔を拭かうと手拭を手に取つて顔にあてますと、中から卵がバチリと爆ぜて、いやと云ふ程眼瞼を刺しました。

慾助益々面喰つて、手も足も出しやうがありませんから、半狂亂の躰でドッカと椅子にお尻を下ろすと、留針がチクリ、

ワッとお尻を摩りながら澁面して起ち上り、床の上へかけづり上つて、頭を枕に載せると、縫針がグサリ、

慾助今は痛いやら、氣味が悪るいやら、到底怪物屋敷のやうな家に居られません

ので、一目散に戸を開けて逃げ出さうとしますと、上から砥石が頭の巔邊へドシンと落ちて、その儘其處にグーの音も出ず往生しました。

梁の上で始終を見て居た雞が『萬歳ッ』と一聲大さく唱へますと、他の勇士も口を揃へて『萬歳、』『萬歳。』

全體此の慾野深助は、何うしてこんな酷い死を盡げたのでせう。

〔解說〕この話は、まるで皆さん御存知の猿蟹合戰のお話に相談して作つた程似て居ます、慾野深助と名乘る程の人だから、定めて人を虐めたり泣かしたりして、無理非道にお金を溜めたので、こんな無慘な死を盡げたのでせう、世の中は自分の慾ばかり謀らないで、世の爲め、人の爲めと盡せば必らず善い報ひが來る

に相違ありません。

物言ふ骨

むかし或る國で、一疋の大きな猪が出て、田畑を荒したり、家畜を殺したりするのみか、人間にまで害を及ぼすといふ大騷動なので、毎日のやうに百姓共は王樣へ訴へ出ました。

王樣も大屠御心配で、猪を殺した者には澤山の御褒美をやるとお布令を出されましたが、何分猪が素敵もなく大きいのと強いのとで、殺すは愚か側へ寄る者も御座いません。

そこで、王樣も此儘に捨置いては一大事と、誰にもせよ、猪を打ち留めたものにはたつた一人のお姫さまを下され、一國を讓つてやると迄御決心をなさいました。

この時、或る貧乏な百姓の息子に二人の兄弟がありましたが、我れ功名して王國を

譲り受けんと、二人揃つて猪退治を願ひ出ました、この二人のうち、兄は武勇にかけては自分に勝つ者はあるまいといふ風に、腕前を誇つて高慢痴氣な性でしたが、弟は又兄と大違ひで、至極無邪氣な、罪のない素直の性でした。

兄弟は心を合せ、猪の住む森の東西から挾撃に攻め立てやうと、兄は其夜早速燥急立つて出掛けましたが、弟は翌朝早くより充分に用意して出掛けました。

弟が森の朝霧を分けて行きますと、天から降つたか地から湧いたか、ヒョッコリと一人の一寸法師が出て來て一本の手鎗を渡し、『あなたは無邪氣で罪のない善い方ですから、私の手鎗を差上げます、これで猪を爲留めておやりなさい、少しも怪我や過失はありませんから。』

弟は篤く禮を述べて手鎗を受取り、勇んで猶もズン〳〵奥の方へ進みますと、例の猪が牙を鳴らし、大きな聲で唸りながら猛り狂つて跳びかゝつて來ましたから、弟は占めたと手槍を眞正面にしこぎ、猪の胸の急所を狙つてブスリと突きましたか

ら、さしもの大敵もコロリと其場に斃れました。

弟は早速猪を脊負つて森を出て、街道筋までまゐりますと、今日猪を退治に兄弟が森へ行つたと聞いた大勢の百姓が、先づ前祝ひとお酒宴をして、飲めや謠へやの大騒ぎでした。

一日中森を馳けずり廻つた揚句、何の獲物もなく歸つて來た兄は、このお酒宴の連中に入つて、盛んにお酒を飲んで勇氣をつけながら、『今日は運が惡るくて獲物がなかつたが、明日は屹度猪を爲留めてやらう、何んの弟なんぞの弱虫で出來るもんか』と高をくゝつて安心して居ましたが、弟が猪を脊負つていそ〳〵歸つて來たのを見て、吃驚仰天すると共に、むら〳〵と憎らしいやら、羨しいやらの毒心が萠して來ました。

けれど、兄はそんな氣をチットも顔へ出さず、にこ〳〵しながら弟に、『やあ、大變な手柄で嘸骨が折れたらう、まあ一杯飲むかいゝ』と申しますから、もとより無

邪氣で優しい弟は少しも怪まず、兄の側で盃をとるのみか、自分の功を誇らぬ人ですから、今朝途中で遇つた一寸法師のことをつゝまず話し、全くそのお蔭で首尾能くいつたのですと申しました。

心に一物ある兄は、態と談話を延して夕方まで飲んで居り、四邊が眞闇になつて人影の無くなつた頃立上つて、さあ家へ歸らうと弟と打ち連れて出掛けました。

途中橋の架つた谷川に差しかゝつた時、兄は唐突に弟を谷底に突飛ばし、さうして自分は懸崖を攀ぢ降りて弟の死骸を砂に埋め、猪を奪ひ取つて王樣の前へ持つて出て、弟は不幸にも猪の牙に突殺されたが、自分一人が勇氣を振つて打ち留めて來ましたと、誠しやかに申しましたから、王樣も本當だと思召し、約束通りに亡き後は國王の位を繼がせる事にし、差當り王子として御殿に住ませておきました。

然し惡い事はどんなに巧く隱した積でも、天知る地知るとか申しまして、何時かは露現せずにはすみません、この事があつてから幾年も經た後のことです、一人の

百姓が、その昔弟が兄の爲めに突飛ばされた橋の上を通りましたが、フト谷底を覗きますと、砂の上に笛の形をした眞白な骨がありますから、早速拾ひ上げて來て、角笛の代りに作りましたが、先づ試みにと一吹き吹くと、不思議や笛は自づと氣息の調子に合せて、

私を殺したその人は
底の砂地の下ふかく
私を埋めたその人は
他ではない兄さんだ
猛る猪ころしたは
他ではない私なの
けれどお國を貰つたは

私を殺した兄さんだ

と憐れな聲で歌ひますので、百姓は驚いたの驚かないの、氣味が惡るくなりましたので、兎も角も王樣にお見せ申すがよからうと思ひましたから、すぐと其足で御殿へ行つて、不思議の笛を献上しました。

王樣は百姓の云ふ通りに御自分で吹いて御覽になると、成程『私を殺したその人は……』と奇妙な歌を唱へ出しますので、元より賢い方で御座いましたから、偖はとお心附になり、早速お側の者に王子の御詮議をさせると同時に、別に人を遣して橋の下を堀らして御覽になると、弟の骨が殘らず出ました、かう證據があがつては如何なる惡漢も隱しきれません、王子はスツカリ自分の罪を白狀しましたから、早速袋詰にして河に流させました。

弟の骨は改めて立派な塋穴に移し、大きなお寺まで建てゝ鄭寧に後生を吊つておやりになりました。

〔解說〕皆さんが歴史を御覽になつても、昔から惡事陰謀を働らいて、しまひまで露現せずに居た例はありますまい、諺にも『天知る地知る人知る』とて、惡るい事の未まで知れんですむ筈はないのですから、人は正直にして世を渡らねばなりません。

三つの言葉

瑞西の國に一人の伯爵がありましたが、そのたつた一人の若樣は生來の馬鹿で、いくら學問を敎へても覺へません。

或る日伯爵は若樣を呼びつけて、『私も今迄お前の學問にはいろ／＼骨を折つたが、何一つとして覺へて呉れん、この上は都へ出て立派な先生につき、何でも一つ覺へてお出で』と涙を流さんばかりに戒めました。

若樣は早速都へ出て、まる一年勉强して歸つて來ましたから、伯爵も大喜びで何

を覺ゑて來たかと尋ねますと、『父上、私は犬の鳴聲を聞分ることを覺ゑて來ました』と平氣の平左衛門、

伯爵も落膽して『あゝ、それがお前の一年間の勉强か』と、叱る張合もなく呆然して居ましたが、又氣を取直して若樣を他の都へ勉强に出しました。

すると、若樣は又まる一年過ぎて歸つて來ましたから、伯爵もこん度こそはと尋ねて見ますと、『父上、私は烏の鳴聲を聞分ることを覺えて來ました』と前の如く洒々然、

伯爵もとう〳〵火のやうに怒つて、『大切な時間を潰して祿でもない眞似が出來たものだ、お前は耻も何にも知らない馬鹿者だ、もう一度父の慈悲で勉强さしてやるから、こんど何にも覺ゑて來なんだら親子の緣もこれ限りだぞ』と、嚴しく叱つて又他の都へ出しました。

若樣はまた一年過ぎて歸つて來ましたから、伯爵は待兼ねて聞いて見ますと『父

上、私は蛙の鳴聲を聞分ることを覺ゑて來ました』と例の調子、

伯爵もぶる〳〵と身震ひして怒り、早速お側の人々を呼びつけて、『こんな馬鹿者はもう私の子ではないから、少しも早く森の中へ引摺つて行つて、殺してしまへ』と嚴しく命令しました。

お側の者共も、主人の命令に致方なく、若樣を森迄は引摺つて來ましたが、流石に愍然で殺されませんから　鹿の子を捕へてその眼と舌とを刳り取り、若樣をこのやうに殺して來ましたと伯爵をごまかしておきました。

若樣は、お側の者共の情で生命は助けられたものゝ、淋しい森の中へたつた一人取殘されて、今宵宿る所もありませんので、とぼ〳〵と當所もなく彷徨きますと、とある塔の前に出ました。

ところが、此の塔の附近には、澤山性の惡い野良犬が住んで居まして、何にも知らぬ旅人などが宿りますと、其の夜の内に喰殺しますので、今は腰を掛けて烟草一

吹吸ふ旅人もありませねば、近所の人々もこわがつて、夕方から家を出る者も無い程の、それは〳〵恐ろしい塔でした。

若様は、そんなことゝは元より存じませんから、今夜は此處で寢て又明日の考へにしようと、蜘蛛の巣だらけの眞闇な間にはいり、埃の中にごろりと高鼾で眠りました。

眞夜中とも思ふ頃、遠くの方から恐ろしい唸聲がして、犢程ある澤山の野良犬がぞろ〳〵と眼を怒らし、眞赤な舌を吐いてやつて來ましたが、若様の寢て居る間に跳び込むや、急に尾を垂れたり、耳を振つたり、身體を擦りつけたりして狎々しくし、やがて口を揃ねてワン〳〵と申しますには、『塔の下に澤山の寶物が埋まつて居ますが、誰一人として存じません、これを此儘にして棄てゝおくは、如何にも天下の弊ですから、堀出せと此塔に宿つた者に申しますが、悲しいことには言葉が通じませんので、つひ私共も腹が立つて喰殺すのです』と具に告げました。

その内夜も白々と明けましたから、若様は早速その國の王様の御殿に出て、昨夜犬の申した通りを訴へました。

王様もなか〳〵信ぜられませんでしたが、先づ試にと多くの人夫を出して、塔の下を堀らして御覽になると、それは〳〵見事な寶物がこて〳〵と出ましたのみならず、其の夜から恐ろしい犬も出ませんでしたので、附近の民もホッと安心の息をつきました。

王様は天にも登るやうなお喜びで、早速御自分の美しいお姫さまを、若様のお嫁さんに下さつたので、二人は夫婦の仲睦しく、樂しい月日を送りました。

それから少し後の事です、若様夫婦は綺麗な馬車に乘り、都へ用事があつて出掛けましたが、行く〳〵沼地の所を通りますると、一疋の蛙が喉をから〳〵鳴らして何かいつて居ましたが、若様の外、奥様初め、お側の人々には何を申すのやら分りませんのみならず、又少しも注意いたしませんでしたが、若様は獨り何か考へて居

ました。

程なく都につきますと、大本山の僧正様がお亡くなりになり、多くのねらい坊さん達が、我れ一番にその後繼にならうと、すつたもんだの大騒動の眞最中でしたが。

いくら坊さん達が、血眼になつて競爭しましても、なか〳〵後繼が極まりませんので、とう〳〵誰でも、人の及ばん術を示した者を後繼にすることゝ致しました。

丁度その相談が纏りました時、若樣が大本山に參詣しますと、何處から舞つて來たのか二羽の鳩が兩方の肩にとまり、並居る坊さん達を少しも恐れる景色はありませんでした。

坊さん達はこれを見て、あの人こそ唯人ではないと思ひ、僧正樣になつて呉れと賴みましたが、若樣は元より何も存じませんので、唯うろ〳〵して居ますと、二羽の鳩が耳の近くに嘴を寄せて、『早く承諾なさいよ』と勸めますので、とう〳〵皆のいふ通りになりました。

坊さん達は、早速の承諾を喜んで、いろ〳〵立派な式を擧げて、本式の僧正樣にしてしまひましたが、さて困つたのは、御祈禱を一言も存じませんことでしたが、此時迄未だ肩にとまつて居た二羽の鳩が、代はる〴〵耳元で囁いて呉れましたので、難なく大役をすまして後は、多くの人々から尊まるゝ偉い人になりました。

(解說)大切な學課をよそにして、他の事に心を散らすは元より惡い事ですが、皆さんが家に居る時でも、外出した時でも、眼にとまつたつまらぬ草や木でも、又は小さな動物でも、心をとめて研究して見ますと、學校で敎はつた博物學などに大層な益を得るものです、それ故に學課以外の事でも、常に見るもの聞くものに注意して、なるべく澤山の知識を得ることを心掛けねばなりません。

四人兄弟

貧乏な父が、或る日四人の子を膝下に呼寄せて、『知つての通りお父さんは貧乏な

ので、氣の毒だが何一つ讓つてやる物がないたが、お前達も年頃になつたのだから、世の中に出て何なりと一つ職を覺ゑ、各自に金儲をして貰はにやならん』としんみり申しました。

そこで四人の兄弟は、旅裝束もそこ〳〵に、父に暇乞ひして家を出ましたが、もの〻二三丁も來たかと思ふ頃、とある四辻に出ました。

一番の兄が申しますには、『なんと弟達、私等四人、この四辻からみんな別々の道を行き、まる四年經つた今月今日、お互ひに立派な身になつて芽出度出會ふじやないか』と發議しますと、三人の兄弟も何より面白い考へだと賛成しましたので、四人は此處に袂を分ちて別々の道を行きました。

さて、長男はすた〳〵と行手を急ぎますと、一人の男が向ふから來て、何の爲めに何處へ行くんだと尋ねますから、

長『別段何處へといふあてもありませんが、何なりと一つ職を覺ゑて、金儲をいた

しませうと存じまして。』

○『左樣か〳〵、さういふ事なら私と一緒に來るがいゝ、世に二人とない立派な盗棒に仕上げてやるから。』

長『エッ、盗棒にと仰るんですか、そんな事を覺ゑましたら、金儲はさて措いて大事な〳〵首が危ふ御座います。』

○『はゝあ、馬鹿正直な人もあればあるものだ、そんな首の危い盗棒じやないよ、お前が人から頼まれたり、又自分にこれぞと思ふ物があつたら、何なりと手に入れる事の出來る調法な事さ、人の物を奪つたり掠めたりする、そんな罪な盗棒じやないよ。』

長男も、成程それなら覺ゑて損にならん事と思ひましたから、その人を師匠にして、一心不亂に四年の間勉強しましたら、しまひには何でも自分が心に留めたものは、必らず手に入れる程になりました。

次男もすた〳〵と行手を急ぎますと、又一人の男が來て、何の爲めに何處へ行くんだと尋ねますから、長男と同じやうに答へますと、

次『そんなら、お前は一體全體どんな職を覺えやうと思ふんだい。』

○『まだ別段これとも定めませんが。』

父『そんなら私と一緒に來るがいゝ、世に二人とない、立派な天文家に仕上げてやるから、これを能く覺ゑて御覽、誰の眼につかん物でも、どんな所に匿してあるものでも、嚢の中の物を捜すやうにハッキリ分るよ。』

次男は、そんな不思議な術を覺ゑたら、世の中のことは自分の思ひ次第と思ひまして、その男を師匠として夜晝なしに勉強しましたから、四年目には立派な天文家になりました、御師匠さんはもうよい時分と、一つの遠眼鏡を次男に渡して、

『これでさゑ見れば、天地の間の何一つとして、餘人は知らずお前の眼に見ゑない物はないよ。』

三男も途中で一人の獵師に出遇ひ、その人を師匠として獵のことに勵みましたから、四年目のしまひには、目に觸れたものは何んな豆粒程小さい虫でも見逃がしませんでした、御師匠さんはもうよい時分と、一挺の弓を三男に渡して、『この弓でさへ射れば、餘人は知らずお前の放つた矢ならば、どんな小さな物にでも萬に一つも射損じはないよ。』

末子も途中で一人の男に出遇ひ、何の爲めに何處へ行くんだと尋ねられますから三人の兄と同じ返答をいたしますと、その男が、

○『お前そんなら仕立屋さんになる氣はないかい。』

末『折角の御親切だがお斷りします、朝から晩まで盤坐をかいて、針や火熨斗を持つて暮すのは、あんまり氣がきゝませんからねい。』

○『私のいふなあ、そんな世に有觸れた仕立屋さんじやないよ、まあ私と一緒に來て御覽、屹度お前さんが感心するから。』

と申しますので、末子もつい其の氣になり、その男をお師匠さんにして四年の間骨身を惜まず習ひましたので、しまひには立派な腕前となりました、お師匠さんはもうよい時分と、一本の針を末子に渡しまして、『この針一本さへあれば、餘人は知らずお前の腕なら、卵のやうに軟かいものでも、鐵のやうに硬いものでも苦もなく縫へるよ、そして縫目が少しも分らんから奇妙さ。』

こんな具合に、兄弟四人各自に一つの職を覺ましたので、家を出る時約束した日にきちんと例の四辻で出合ひ、互ひに無事なのを喜んで父の家に歸り、代はる代はる何吳れとなく話しました、

父は或る日大きな樹の下に、兄弟を集めて、今からお前達四人の腕前を競べて見る』と申しまして、先づ次男に、

父『この樹の枝に雀の巣があるが、卵が幾箇あるかあてゝ御覽。』

次男は早速例の遠眼鏡を出して覗きながら、

次『五個あります。』

すると父は、長男に向ひまして、

『お前その卵を、親島が翼で抱へて孵へして居るだらうが、少しも覺られんやうに奪つて來て御覽。』

長男は早速樹へ攀ぢのぼつて、孵へして居る雀の卵を、少しも親鳥に氣取られんやうに、五箇ながらソッと奪つて來て父の前に差出しました。

父は五箇の卵を、大きな檀の四つ隅と、眞中とに置きまして、三男に、

父『一本の矢で、五箇の卵にみんな中てゝ二つに割つて御覽。』

三男は早速例の弓を出して、矢をヒュッと放ちますと、カチ〳〵〳〵〳〵と五箇の卵に見事に中たつたのみか、小刀で切つたやうに二つづゝに割りました。

父は末子に、

父『こん度はお前の番だよ、この二つづゝに割れた五箇の卵を、すつかり元のやう

に縫目を附けずに縫つて御覽。』

末子は早速例の針を取出して、卵をみんな縫ひましたが、縫目は愚か粟粒程の痕もつけませんでした。

そこで、長男が再び樹へのぼつて、その卵を親雀の翼の下へそつと入れてやりますと、雀はそんな事があつたとは少しも氣付きませんのみか、二三日過ぎると可愛らしい雛が五羽チユ〳〵と孵へりました。

父は四人の子の腕前に喫驚して、『さて〳〵我が子ながらも、兄弟揃ひも揃つて大した腕を磨いたものだ、四年の月日は短くはないが、よくも人並すぐれた人間になつて呉れた、けれど四人の内で、誰の職が一番役に立つやら、今の所じや何ともいへないが、又その内にわかる時節が來ないとも限らん』と、我が子の立派な出世をほく〳〵喜んで居ました。

すると、それから程なく、この國で一つの大騒動がはじまりました、王樣のたつ

た一人のお姫さまが、恐ろしい大蛇につれられてお姿がスツカリ分りませんので、王樣は夜晝もない御心配、御家來の衆や、國中の民にお布令が出て、草を分け、地を堀つても搜し出せと嚴しいお言葉でしたけれども、お姫さまのお姿は愚か、足跡も見附かりませんので、とう〳〵お姫さまを搜し出して伴れて來た者には、誰にでもお嫁にやるとまでのお悲み。

こちらは四人の兄弟で御座います、日頃の腕前を見せるは此時だと、『我々四人が力を合せたら、なんの世の中にむつかしい事があるものか。』と勇み立ちましたが、さて何方の方角へ搜しに出てよいかと困つて居ますと、次男が早速例の遠眼鏡を出して暫く覗いて居ましたが、『あゝ見わた〳〵、海の中に大きな岩があつて、其の上にお姫さまが坐つて御座るが、胴の周圍が樽ほどもあらうと思ふ大蛇が、側に皿程な眼をきら〳〵さして見張つて居るよ』と申しました。

そこで四人の兄弟は、王樣の前に出て一艘の船を借り、次男の申した海の方へ漕

ぎ出して見ますと、成程大きな岩があつて、其の上にお姫さまは泣きながら坐つて居ましたが、見るも恐ろしい大蛇が、お姫さまのお膝の上に頭を載せて寝んで居ました。

獵師の三男は、大蛇を射て殺すは何より容易い事ですけれど、ひよつとしてお姫さま迄殺しては何の益にもたちませんので、頓足踏んで悔がつて居ますと、長男が早速、『俺の手並を見せてやらう』と岩に飛び上り、ソツとお姫さまを抱いて來て船に乗せましたが、流石の大蛇も何にも知らず、未だ軟かいお膝を枕に寝んで居ると、思ひ、硬い岩に頭を載せてぐう〳〵の高鼾。

四人は占めたと大喜びで、艫拍子勇ましく逃げ出しましたが、程なく眼を覺ました大蛇はお姫さまが居ませんので、怒りの眼凄く鏡のやうに光らし、焔でも吐きさうな眞赤な口を開き、兄弟の船を目掛けて唯一呑みと、荒浪を立て、一目散に追つて來ました、

其の時三男は少しも騒かず、持つて居た弓に矢を番へてピユーと放つと、狙ひ過たず大蛇は胸をグサと射貫かれて、とう〳〵海の藻屑と沈みました。

大蛇は芽出度退治られましたが、三男が強い矢に射貫かれて、七顛八倒の斷末魔に小山程の浪を立てましたから、木の葉のやうに小さい船は忽ち轉倒り、其邊に岩でもあつて衝當つたものか、ばら〳〵に毀れましたので、お姫さまは無論のこと、四人の兄弟も、一つ二つの木片に生命の綱としがみついて、ぶかり〳〵と浮いて居ましたが、末子の仕立屋は早速針を取出し、彼方此方浮かんで居る板を縫合せましたら、再び元のやうな船になりました。

そこで、兄弟はお姫さまをいろ〳〵介抱しながら、難なく岸へ漕ぎ付けました。

四人は早速お姫さまをつれて、王樣の御殿に出ましたので、王樣は天にでも登つたやうなお喜び、兄弟に有難いお言葉が澤山あつた後、『姫をお嫁にやるにしても、四人ではどうも仕方がない、お前達の内で早く相談して、誰でも一人極めるがいゝ』

と仰いましたが、誰が一番手柄をしたとは申されませんので、とう〳〵兄弟喧嘩がはじまりました。

次男が先づ申しますには、

『私が一番先き、お姫さまが何處にゐらつしやるか見なんだら、兄さんや弟が、いくら腕前を見せやうと思つても駄目じやないか、だからお婿さんになるのは私です。』

と申しますので、長男も默つては居ません、

長『お前はそんな事をいふが、お姫さまを大蛇から奪つて來るといふのが、一番肝腎な仕事じやないか、だからお婿さんになるのは私よ。』

と申しますと、三男も負けずに口を出し、

三『いくら兄さんがお姫さまを救つたつて、あの大蛇が大口を開いて追掛けて來た時をお忘れですか、あの時私が射殺さなんだら、大切なお姫さまは無論のこと、

兄さんだつて、弟だつて、今頃は大蛇の胃嚢の中にはいつて居る頃ですよ、だからお婿さんになるのは私です。』

と申しますと、末子は口を尖らして、

末『兄さん大層御自慢ですが、小さな木片につかまつて、すんでの事に土左衛門になる所を、船を縫合したのは誰の手柄です、だからお婿さんになるのは私です』

と、何時までたつても果がつきませんのみならず、又四人の申すことが一々尤もなので、王樣は、『もう口鬪爭は止めるがいゝ、お前達四人の申條は一々尤もで、誰れに姫をやるといふ譯にもいかんから、一層のことその約束は反故にして、改めてお金を澤山御褒美に上げるとしやう』と申されましたので、一旦は喧嘩はしたものゝ、根が仲の善い恰悧な兄弟ですから、王樣から澤山のお金を貰ひ、一人の父を大切にして、樂しい月日をおくりました。

三人の懶惰者

遠い〳〵ずつと世界の果てに、一人の王様が三人のお子さんを持つて居らつしやいました。

王様は三人のお子さんを。どれもこれもお可愛がりなすつて、もし御自分が崩御になつたら、どの子に國を讓らうと、その事ばかりを御心配でした。

さて王様が崩御にならうとする時、三人のお子さんを枕下にお呼び寄せになり、眞面目なお顏で、『お前達三人の内で、一番懶惰者に王様の位を上げるよ』と申されました。

すると、一番年嵩の兄さんは、『父上、この王國は私が戴きます、何故と申すと、私は仰けに寢て居ますとき、上から何が眼の上に落ちて來ましても、眼をつぶるのが厄介ですので、開いたまゝ寢て居ます程の懶惰者で御座いますから』と申しました。

次の兄さんは、『父上、この王國は私が戴きます、何故と申すと、私は兩足を投げ出して火にあたつて居ますとき、足の指に火が燃ねついて來ても、引込ますのが厄介ですので、足の指の燃ねる儘にしておく程の懶惰者ですから』と申しました。

末のお子さんは、『父上、この王國は私が戴きます、何故と申しますと、私がもし首を荒縄でぐる〳〵巻きにされて、縊り殺されようとする時がありますとして、側の者が、私に首の荒縄を切つて逃げよといふて、小刀を手に渡して呉れる者がありましても、手を動かすのが厄介ですから、其の儘縊り殺されるのを好む程の懶惰者ですから』と申しました。

王様は三人のお子さんの、懶惰さ加減をお聞になり、末のお子さんに、『成程お前が一番懶惰者だ、私が死んだら王様になるか好い』と申されましたとさ。

〔解説〕このお噺は、全で反對のことを申しましたのです、末のお子さんのやうな方が、王様になりましたら、國は直きに亡びてしまひます、ひとり國のみではあ

りません、一家を治めるにしても、こんな懶惰者は論外ですが、人は出來るだけ業に勵まねばなりませぬ。

青い光

先づ或る處に、一人の兵士がありまして幾年も王様に事へて居ましたが、たうと一文のお給金も戴かず、又何一つ御褒美も受けずに、暇を出されました。

思ひ掛け無く、一文の貯へもなくてお暇の出た兵士は、この先きどうして生計を立てゝいゝかわかりません、兎に角生れ古郷に歸つてからの考へにいたしませうと、一人とぼ〳〵と元氣なく、故郷を指して出立しますと、其の日の夕方にこんもりした大きな森の側に出ました。

四方は追々暗くなりまするし、お腹は段々へつてきましたが、泊る家もなければ、お錢もないから仕方御座いません、疲れた足を引摺りながら、森の中を進んで行き

ますと、遙か彼方にちら〳〵と火が見ゑました、兵士は大層喜んで、火が見ゑるからは家があるに相違ない、今夜は其處に泊てもらつて足とお腹を休めやうと、俄かに元氣を出して行つて見ますと、一軒の見すぼらしい小屋が御座いまして、一人の魔法使ひの婆さんが住んで居ました。

兵士は家が見附かつた嬉しさに、何にも構つて居られません、戸をどん〳〵叩いて頼みますと、漸やくのことで婆さんが出て來て、『お前さん、明日の朝私の田地を殘らず耕して呉れたら、今晩泊めて上げやう、それでなくば、お氣の毒だが泊めることは出來ないよ』と申しました、けれど兵士はこの上一足も行かれませんので、心よく承知してその夜は此家で御客様になりました。

翌朝になつて、この正直な兵士は昨晩の約束通りに、魔法使ひの婆さんの田地を丁寧に耕やしてやりましたら、またとつぷりと日が暮れかゝりました、然し婆さんは仕事がすんだら、サッサとお歸りと申しますので、兵士は『成程一晩の約束でし

たが、今日一日の仕事で大層疲れました、どうぞ、もう一晩泊めて下さい』と願ひました、婆さんは頑固になか〳〵聞入れませんでしたが、兵士が折入つて頼みましたので、それなら又明日は澤山薪を伐つて呉れたらといふ約束で、漸やく納得して呉れました。

翌朝につて、又この正直な兵士は薪を澤山に伐つてやりました、然し其の日は未だ夕方に間もありましたが、何分前の日からの働きつゞけで、身体が綿のやうに疲れましたからまた今晩も泊めて下さいと頼みました、婆さんは昨日のやうに、なか〳〵聞入れて呉れませんでしたが、明日は婆さんの爲めに、井戸の底に燃ねて居る、青い光を取つて上げやうといふ約束で、やつとのことで又承知して呉れました。

間もなく夜が明けますと、婆さんは昨晩の約束だからと、兵士をつれて裏の深い井戸の所までまゐりまして、長い〳〵縄で兵士の腰を縛り、井戸の中へづるづると

引下げました。

婆さんに長い縄で縛られ、深い井戸へ引下げられた兵士は、やがて底に足が届きますと、成程婆さんが言つた通り、青い火がちよろ〳〵と燃ねて居ますから、早速手に其を取つて引上げて呉れと相圖をいたしました。

もと〳〵善くない魔法使ひの婆さんですから、青い光を取つて來て呉れた兵士を、井戸の口元まで引き上げた時手を出して、『消ねるといけないから、私に其の光りを早くお渡しよ』と申しました、そして心の内では、自分の欲しい光が手に入つたら、再び兵士を井戸の底へ引下げて、殺してしまふ心算で御座いました、しかしこの兵士はなか〳〵怜悧ですからウカと其の手にはのりません、『今上げますよ、私がスツカリ井戸の外へ出たら上げますよ』と聞入れませんでした。

案に相違せず、婆さんは心の底まで見透かされたと思ひましたので、火のやうに怒りまして、青い光を手に持つた儘の兵士を、再び井戸の底へ引下げました。

氣の毒なこの兵士は、太陽の光も見ぬ井戸の底の、ジク〳〵した泥の内にピタリと横になつて、もう二度と生きて出られぬ不仕合せを嘆いて居ましたが、別にいゝ考も無論御座いません、衣嚢の内から吸ひ殘してあつた烟草を取り出して、『せめてはこの世のお仕舞ひに、烟草なりと吹かして死にませう』と手にした青い光で吸ひ付け、さもお旨しさうに、スッパ〳〵と吸つて居ました。

烟草を吸つては、プットその煙を上の方に吹ひて居ますと、不思議〳〵、煙の中からヒョッコリと、一人の小さい一寸法師が現はれてまゐりまして、『足下、私に何か御用はありませんか』と、小さい聲で尋ねました、あまりの不思議に、兵士は一時ビクッと驚きましたが、氣の強い人で御座いましたから、すぐと平氣な顏で、『お前なんぞに、何んにも用はないよ』と、再び烟草を吹かして居ました。

けれど一寸法師は立ち去りません、『足下、何んにも御遠慮はいりませんよ、私は足下を青い光の王樣といたしまして、どんな御用でも厭ひません、先づ手始めに井

戸の底から御救ひいたしませう』と、いふより早く兵士の手を握りました、手を握られて兵士は、いふが儘にして起き上りますと、豆のやうに小さい身體に、どうして恐ろしい力がありますのやら、一寸法師はフワ〳〵と身を浮かせて青い火を手に持つ儘の兵士を、難なく井戸の外へ引摺り出しました。

不思議の助けで、再びこの世の人となりました兵士は、『どうも有難う、もう一度御苦勞だが一骨折つて、あの魔法使ひの婆さんを、私の代りに井戸の底へ投げ込んではくれまいか』と相談しますと、一寸法師は譯もなく承知して呉れまして、どうして婆さんをつれ出したものか、難なく井戸の中へ投げ込みました。

手輕に敵を打つた兵士は、喜び勇んで一寸法師と共に、婆さんの小屋に踏み込んで、澤山に貯へてあつたお錢を殘らず奪ひ出しました、其の時一寸法師は兵士に向ひ、『足下、これからでも、私に何か御用がありましたら、其の青い光で烟草を吸ひつけて下さい、さうして下さいますれば、キット何處へでもまゐりますから』と、

いふかと思へばフット消ねてなくなりました。

急にお金持になつた兵士は、大威張でそこを出立しまして、次の夜は一番賑かな町の、一番上等の旅館の、一番美しい部屋へ宿を取りまして、お旨しい物や、直の高い着物なぞを誂へて大層得意になり、そして何を思つたか再び烟草を取り出し、例の青い火で吸ひつけますと、その煙の消ねぬ間に一寸法師がヒヨコリとまゐりました、兵士は、『王様は私に一文の給金も呉れずに酷い目に遇はせたから、一番讎を打たねばならん、お前御苦勞だが、今晩御殿に潜び込んで御姫様を奪つて來て呉れ。さぞ王様が驚ろくことであらうから』と賴みますと、一寸法師は、『それはなか〳〵浮雲い大仕事です』とは申しましたが、程なくよく寐んで居らつしやるお姫様を、窃と眼を覺ませんやうに、兵士の所まで奪つてまゐりました。

翌朝まだ暗い内に、一寸法師はまたお姫さまの眼の覺めぬやうに、窃と御殿のお寢間の中へつれてまゐりましたから、お姫さまは何處へ連れて行かれたことやら御

存知御座いません、程なくお目醒になりまして王様に、『お父さま、私は昨夜不思議な夢のやうな、夢でないやうな目に遇ひました、私の身體がスウッと空を飛んで、お父さまが先日お暇をお出しになりました、彼の兵士の宅にまゐりまして、下女同様に酷使はれました』と仰せられますと、王様はお驚きになつたのみか、大層御心配になつて『今夜もまたそんな事があつてはならぬから、お前の衣嚢に小さな孔をあけて、豌豆を一ぱい入れてお置きなさい、さうすればお前が何物かに連れられて、宙を飛んで行くとき飜れるに相違ない、その飜れた豆の跡をつけて捜して行けば、お前がつれて行かれる家を見附け出す何よりの手掛りになる』と、お吩咐けになりました、お姫さまは成程と思召しめして、お父さまの仰せの通りに、畫間のうちから御用意なさいましたが、例の影も形も見ぬ一寸法師は、何處にどうして隱れて居ましたことか、お二人の相談をスッカリ聞込みました。

やがて其の日も夜になりますと、旅館の一室に居た兵士は、又一寸法師に今夜

もお姫さまをつれて來いと命しました、一寸法師は晝間王樣の謀計を立聞きして居ますので、御殿からお姫さまをつれだす前に、澤山の豌豆を町中に撒きちらして置きましたから、御姫さまの衣囊から、少しばかりの豌豆が飜れましたとて、何のわかる道理が御座いませう、唯翌朝になつて町の人々が、これは何處から降つて來たのか、素敵に澤山の豆があると、大よろこびで拾ひましたのみで、折角の王樣の謀計は、何の役にも立ちませんでした。

王樣は折角の謀計がフイになりましたので、大層お落膽で御座いましたが、今度はお姫さまに、『今夜また伴れて行かれたら、ソッとお前の靴を脱いで、その部屋に殘しておいでなさい』と仰せられましたが、また例の一寸法師に立聞かれてしまひました。

三日目の夜も兵士は、またお姫さまを伴れて來いと一寸法師に申しますと、晝間の靴の謀計を存じて居ます一寸法師は、頭を左右に振りまして、『足下、今夜はあぶ

ない〳〵、下手をすると捉へられますよ』と注意しましたが兵士は一向聞入れません、一寸法師は止むを得ず、『それなら致し方も御座いません、たゞ充分に御注意下さいませ、そして翌朝未だ町の者が寢てゐる内に、早く逃げておしまひなさい』と親切に申しまして、其の夜もお姫さまを窃と伴れてまゐりました。

お姫さまも其の夜はお父さまの仰せのやうに、御自分の靴を脱いでソット兵士の部屋に秘してお歸りになりまして、そしてお父さまにお告げになりました、そこで王樣は急に多くの兵士を八方にお配りになり、お姫さまの靴の置いてある家をお搜させになつから堪りません、到頭兵士は宿を見附けられて仕舞ひました。

兵士はそれより前に、一寸法師に敎はつたやうに町の外へと逃げましたが、逃げやうが少し遲かつたばかりに、王樣の兵士に捕へられ、それは〳〵嚴重な牢屋へ入れられましたのみならず、太い鎖でぐる〳〵捲きにされました、まだそれ許りでなく大の失錯には、今朝逃げる時に餘り急いだので、生命から二番目に大切な例の

青い光と、お錢を澤山に入れて置いた財布とをスッカリ忘れて、衣嚢の中には一文の貨幣が有るのみで御座いました。

落膽して元氣なく、悄然と牢屋の内に居ました兵士は、或る日のこと窓の外を、自分の昔のお友達が通るのを見ましたから、早速呼び寄せて、『君、すまないが私の居た旅館へ行つて、殘して來た小荷物を取て來て呉れませんか、御禮にはこの貨幣を一枚差上げますが』と、哀れつぽく賴みますと、旨い儲仕事と喜んだ其の友達は、急いで例の青い光と財布とを取つて來て呉れました。

兵士は占めたと舌鼓を打ちまして、早速青い光で烟草の煙を出して、一寸法師を呼び寄せました、一寸法師は兵士を慰めて、『御心配なさいますな、私が居ればどんな事があればとて大丈夫ですよ、唯青い光をなくせぬやうに御注意下さい』とその儘消ねて行きました。

到頭この兵士は罪に問はれて、絞架の上で殺されることに極まりました、けれど

も兵士は、一寸法師のいつた言葉が御座いますから、少しも恐れません、どうかこの世のお別れに烟草を一服吸はして下さいと、頻に願ひましたので、王樣も別に子細もないことゝ、早速お許可しになりましたので、仕すましたと兵士は例の手段で、一寸法師を呼び寄せ、『お前其處らの奴等を殺すなり追ひ散らすなり、好きなやうにして呉れ、そして王樣も斬り捨てゝ呉れ』と賴みましたから堪りません、一寸法師は颶風の如く飛び廻り、あはや鏖にせうといたしましたから、王樣は驚いて兵士の生命を赦すのみならず、お姫さまと結婚の式を擧げさせ、王樣がお崩御になつた後は、次の王樣にするといふ約束をいたし、漸やく大事に至らずして事がすみました。

〔解說〕永年の間使つた兵士を、一文の給料も與へんでお暇を出した王樣が、御自身のお姫樣のことで大層御心配をなされ、兵士の生命をなくせうとした魔法使ひの婆さんが、井戸の底で死ぬといふのも、皆惡るいことの報であります、惡い種

子を蒔いて、善い果實を得やうといたしますのが無理なやうに、この世を無事に暮さうと思ひましたら、常日頃から善い心掛けが、何よりの肝腎です。

藁と薪と蠶豆

或る田舍の婆さんが、蠶豆を煮て食べようと思ひました。

婆さんは大きな鍋へ蠶豆を澤山入れて竈にかけ、薪と藁とを突込んで、今しも火をつけやうと致しました途端に、一粒の蠶豆が、素早く鍋から飛び出し、一本の薪と藁はコツソリと竈から拔け出して、三つとも生命からゞ臺所から外へ逃げだしました。

可なり遠く迄逃げ延びました時、藁が先づ胸撫で下して、『あゝ、危なかつたゝ、時に友達、君達は一体どうして逃げなさつた』と、尋ねますと、薪もホッと氣息をついて、『イヤ、僕はね、唯もう無我無中で逃げだして、仕合に諸君と此處まで來

れたが、もう一足遲かつたら、今頃はとうに灰になつて居るところだつた』と喜びますと、蠶豆もまた、『イヤ、僕もほんとに酷ひ目に遇ふところだつた、愍然に、同じ畑で育つた友達等は、定めし今頃婆さんの夕飯のお菜になつて、齒もない齦で喰ひ潰されてるだらうよ』とお友達のはかない最後に引較べて、自分の仕合せを喜びました、藁は二人の話をきいて、『君達も運善く逃げ、僕もまあ仕合せよく、此處までお供は出來たものゝ、仲間の事が思はれて不憫でならないよ、婆さんが皺だらけの手で、仲間を澤山ムズと掴んで、頸も腕も折れる程無理に曲げ、竈の中へ捩込んだが、僕一人こうして助かるとは、本當にまあ夢のやうだよ』と、今更のやうに運命の計り難いを思出しました。

時に薪が、『身の上話もこれで切上げて、僕等三人はこれからどうしやう』と相談しますと、蠶豆は子細らしい顏をして、『言はなくても分つて居るよ、お互ひに生命拾ひをして、やつと此處まで逃げた三人だもの、これから先きは仲善く兄弟のやうに暮

さうじやないか、さあ大慨疲勞はぬけたらう、ボツ〳〵行かじやないか、なんにしても、人目にかゝつたら又一大事だ、少しも早いが得策だよ』と。

藁も薪も、蠶豆の申すのを實にもと思ひ、少しも早く何處か遠方の、危げのない山の中で樂しく暮らさうと心を極め、打そろつて旅に出ました。

三人は程なく、唯ある小さい谷川の邊に出ましたが、橋が一つも架つて居りません、ハテどうして渡つたものと、互ひに顏を見合せて思案にくれてゐると、一番丈の高い藁が、善い智惠を絞り出して申しますには、『僕が向ふ岸に手を伸して、横たふしになつて橋の代理を勤めるから、君等二人は其の上を渡ればいゝ』と申しました。

そこで、藁はウンと向ふ岸まで、身體を出來るだけ伸して居ますと、先づ薪が威勢よく、藁の上を滑り始めましたが、あんまり機勢がつき過ぎて滑りましたから、橋の中頃まで渡つたと思ふ時分にポッと火が出て、二人は『熱つ』と唯一聲放したのみ

で、谷川の中へチユウッ、ブスリと沈んでしまひました、蠶豆はこちらの岸からそれを見て、『阿陀佛、阿陀佛』

〔解說〕善いと思へば惡い事が來ますし、惡いと思へば善い事にぶつかる、偖世の中は幸と不幸の入れ交せで、よいことがあつても毫しも油斷は出來ませぬ如く、惡るいことがあつても毫しも落膽すことはありません、唯自分の悉皆の力を出して、何時までも志を變へず、其の上は天命を待つより他にありません。

老犬

ある牧羊者が、一疋の忠義な犬を飼つて居ましたが、追々年をとつて、齒がみんな拔けてしまひました。

或る日牧羊者は、妻に向つて、『明朝は家の犬を屠殺つてしまはうよ、もう飼つておいても役に立たんのだもの』と申しますと、妻は驚ろいて、『だつて貴方、あの犬

は今迄よく仕へましたんですもの、今更役に立たないといつて、殺すのは餘り慾
然ですよ、死ぬまでよくしてやるのが當然ですよ、何卒もう、そんな殺すなんて
酷い事をいつて下さいますな』と、自分の事を頼むやうに申しました、けれども牧
羊者はなか〳〵聞入れません、『お前はそんなにいふけれど、もうあの犬は齒もない
んだせ、それで盗棒が入たり、羊を喰はうと思つて狼などが來ても、何んの役に立
つんだい、そりやお前のいふ通り、今迄長年よく仕へたよ、けれど又役に立たなく
なつてからも、隨分彼奴の面倒を見てやつたぜ、だからお前が何と言つても、明日
は屠殺る事とするよ』と、云ひ張りますから、妻もその儘に默つてしまひました。
今迄主人夫婦の側で、ジッと話を聽いて居ました老犬は、明朝は自分の生命が亡
くなる時かと喫驚しましたが、別に能い分別も出ません、仕方がないので日の暮れ
るのを待つて、程近き森に住む親しい狼の所へ行き、身に降りかゝつた災難を打明
けて、其の考を借りました。

一伍一什をきいた狼は、事もなげに呵々と笑ひ、『お前でもない、そんなに心配す
るにや當らないぢやないか、私が能い智惠をつけて上げるよ、知つての通り、お前
の所の夫婦は、毎朝早く牧場へ出るだらう、それで何時も妻君が赤坊をつれて行つ
て、籬の蔭へ寢かせておくだらう、さあ其處が私の見付處だて、お前明朝は夫婦
と一緒に牧場へ行つて、その赤坊を懸命に番してゐる樣なする顏をしておいでよ、
何處へ私が不意に木蔭から躍り出て、態と赤坊を啣へて逃けるから、お前は喫驚し
たやうな風をして、私の後を追つて來るのだよ、そして私が二三分も走つて、最早
よさそうな時分と思つら、その赤坊を落して逃げるから、お前はそれを急いで主人夫
婦の所へ伴れて行くさ、左樣すりや夫婦は屹度お前が赤坊を助けたのだと思ふから、
殺すどころか、屹度今迄より大切にして飼つて置くよ』と得意氣に敎へました、犬
もよい考へだと大層喜んで、明朝はその通りにしやうと心を極めました。
翌朝何時の通り、牧羊者夫婦は牧場へ行き、籬の蔭に赤坊を寢せておきますと、森

の木蔭から一疋の狼か來て、不意に赤坊を啣へて逃げましたので、夫婦の者は狂氣のやうに叫喚き悶いてゐるばかりでしたが、犬は直ぐ追掛けて行つて赤坊を難なく啣へて來ましたから、夫は早速老犬の頭を輕く撫でゝ、我が子を救つて呉れた恩に對しても、もう酷たらしい殺すなんといふ考へはフツツリと止め、妻は又女だけに喜びも夫よりは上で、其夜から古い座蒲團を敷いてやり、お旨しい物も澤山に食べさせて、可愛がつてやりました、これで先づ老犬の願ひは叶つたといふものです。

すると其の後間もなく、狼が犬の處へまゐりまして、『ときに兄貴、私はお前の主人の飼つている、あの脂肪ぎつた美味さうな羊を一疋窃と頂戴しやうと思ふが、その時お前は知らん顔して居なけりやいけないよ、主人にいらん告口なぞするときかないよ』と、一も二も無く承知することゝ思つて居ました。

ところが、案に相違して、老犬は眞面目に狼の顔をジッと見て、『いやだ、他ならん恩を受けたお前のお願ひだが、どうしても承知することは出來ないよ、私はお前

がそんな惡いことをすれば、無論主人に告げるよ』と、キッパリと斷りました。

けれど、狼は犬の言葉を戯言だと思つて居ますから、少しも氣にかけません、或夜牧羊者の家の垣を破つて、羊を奪つて食はうと潜び込みました、然し牧羊者はその前犬に話をきいて、チャンと知つて居ますので、其夜も今夜あたり狼が來はせんかと、納屋の蔭に隠れて見張つて居ました、狼の方ではそんな事とは知らず、早くお旨しい御馳走に有附かうと、唇を掌擦りながら、ノソリ〳〵と足音を盗んで、納屋の方へまゐりますと、主人が蔭に立つて居て、手頃の棒を隠して持つてるをチラリと見ましたから、失錯つたと一目散に逃げ出しました。

狼は一目散に逃げながら、悔しまぎれに大きな聲で、『老耄犬の惡漢奴』と、犬を大層遺恨に思ひ、屹度敵を討つてやると、心に深く誓ひました。

よつて、狼は翌朝、猪を使者として犬の許にやり、昨夜の怨恨を晴らす爲め、森へ來て果合をせよと挑みました、老犬は狼に挑まれた以上行かぬ譯には參りません

が、力と頼む助太刀が御座いません、仕方がないので牧羊者の家に飼つてある、三本足の不具の猫に頼みました、猫も同じ家に居る犬に頼まれたのですから、大きに侠氣を出して引受け、犬と一緒に森を指して出掛けましたが、何分不具の事で、道を歩くに難澁ですから、尻尾をツンと棒のやうに上に立て、チンガリコ〳〵と行きました。

森の中では狼と猪とが、犬の來るのを今か〳〵と待つて居ますと、遙か彼方から三本足の猫が、尻尾をツンと立て〻來るのを見て刀を持つて居るのだと思ひ、チンガリ〳〵跛を引くのを見て、自分等に投つける石を拾ふのだと思ひましたから、急に怖氣が出て當底かなはんと思ひ、猪は叢の中へ逃込み、狼は樹の上へ飛び上りました。

こちらは老犬と三本足の猫で御座います、漸くことで森の中に來て見ますと、疾くに來て居る筈の狼と猪が居ませんので、不審に思つて四邊と見廻はして居ると、叢の中に隠れて居る猪が一寸と片方の耳を出して居るのを、猫が見附けてテッキリ

鼠だと思ひ、いきなり躍りかゝつて咬みつき、爪でいやといふ程引掻きました。

猪は不意の攻撃に重傷を受け、苦しい鳴聲を上げて走りながら、『樹の上を見よ當の敵が居るから』と泡を喰つて逃げ去りました。

犬と猫は、猪が何をいふかと樹の上を仰いて見ますと、枝の間に狼が小さくなつて縮つて居ましたから、犬は狼が自分の惡るかつた事を耻ぢて、樹から降りて來さえすれば、決して惡くはせんと懇ろに説き聞かし、やがて狼と昨日迄のやうに、親しい交りを誓ひました。

〔解説〕狼に恩を受けながら、犬が其の惡い企圖を聞入れなんだのは、義といふ事を知つて居るからです、恩を返すには他に道があります、大切な義といふことを忘れ、主人の羊を狼に默て奪らせたのでは何の役にも立ちません、この犬が狼の頼みを聞けば、狼も喜び、自分も恩を返すのだと思ふ人は、大きな心得違ひで

す、自分の生命を捨てないまでも自分を苦しめ、又は自分に損をして、恩を受けた人の爲めを思つてこそ初めて恩を知る人です、他人を苦しめ、他人に損をさしては、決して恩を知る人ではありません。

大きな蕪

むかし、或る王様に仕へて居た兄弟の兵士がありましたが、兄は大層有福で、弟はまた至つて貧乏で御座いました。

そこで、弟も何か仕出來して、お錢をつくりたいと思立ちましたから、御奉公をやめて百姓になりました。

それで弟は、早速僅かばかりの地に蕪の種子をおろし、一生懸命に培養しました所が、多くの中に素敵もない大きな蕪が一つ出來まして、その大きくなるのゝ早いことゝ申しましたら、宛然袋でも脹めていくやうで、どれだけ大きくなるのら分らん位で

した、おしまひにはその一本だけでも、牛二頭牽きの荷車で、ヤツと曳けるか曳けん程でした、昔からこんな素敵もない大蕪は、見たことも聞いたこともなく、又これからとても二度と見ることの出來ん程の大きさでした。

そこで、弟は蕪があまり大いので、こんな途方もないものを如何していゝのやら、又お錢になるのやらならないのやら判斷がつきません、頻りにあゝか、かうかと考へて、こんな物を賣ればとて買者もなし、又食べればとて不味からうし、そうだ、一層のこと王様のお目にかけるが上分別と極めました。

そこで、エンヤラヤッと大蕪を荷車に積んで、王様に献上しました所、王様もアッとばかりに喫驚仰天なさいまして、『何といふ素敵もない大蕪だ、我も世に珍らしいといふ珍らしい物は澤山見たが、未だこんな魂消た物は見たことがない、何處からお前はその種子を手に入れた、それとも何かの拍子に出來たのか、それならお前は天下の仕合者だぞ』と仰せられましたから、弟は『噫、なんの王様、私が天下の仕合

者なぞとは飛んでもない、私はもと其の日の生計にも困つた、みじめな兵士でありましたが、到頭御奉公をよしまして、かくも見すぼらしい百姓となつたので御座ります、私に一人有福な兄がありますが、其の名は陛下も御存知なら、天下の人もみな存じて居ます、ところが私は御覽の通りの貧乏人で御座りますから、誰も存じて呉れる者はありません』とつゝます申上げました。

王様は大層慈悲深いお方でありましたから、弟の身上話をお聞きになつて愍然でなりません、『もう今日から貧乏人ではないよ、お前の有福な兄よりも、もつと有福な身としてやらう』と、それは〳〵、有難いお言葉と共に、黄金やら、田地やら、その上羊まで澤山に未代迄の寶にせよと下し給はりましたから、有福な兄とても、到底弟の身上には、比較ることの出來ん身となりました。

是を聞き知つた兄は、羨ましいやら、妬ましいやらで堪りません、自分もひとつ王様の御恩賞にあづかりたいと、腦味噌を絞る程考へました揚句横手をうつて、弟

の奴は取るにも足らぬ蕪一つで、あんなに大した下され物があつたとすると、一時立替ると思つて大金を出し、天下の名馬を購求めて献上したら、蕪に下さつた御恩賞に數百倍して、乃公に並ぶ者なき御扶持が出るに相違ないと思ひましたので、國中の牧場を殘らず尋ね、天下一と名のある名馬を得て、早速王様に献上しました。

王様は兄の献上馬を恭くお受取りになり、さて仰せあるには、『かゝる世に貴く珍らしい献上物に返禮するには、同じく珍らしい何時ぞやの蕪より他にない』と、お側の衆に大勢して大蕪を擔ぎ出させ、これを賜物として下さいました。

日算ガラリと外れた兄は、今更受取らぬ譯にはまゐりません、御苦勞様にも有難く頂戴し、牛二頭牽きの荷車に積み、エンヤラヤッと自分の家まで運込みました。

〔解説〕有るが上にも欲しがつて、この兄のやうに慾張ると、せんでもすむ耻を曝すのみか、損まで脊負はにやならぬ羽目になり、律義一邊で慾のない、この弟のやうに致しますと、思はぬ幸福を拾ふものです、それと同時に、人を謀らうと

致しますと、却つて人に謀られ易ひものです。

浮かれ胡弓

或る百姓の家に雇はれて居た作男が、三年間も牛か馬のやうに酷使はれましたが、鐚一文のお給金も呉れませんので、これでは到底やりきれんと思ひましたから、或る日のこと主人に、『旦那、私もお宅へ來てから、もう三年になりますが、隨分骨身を惜まず働いた積です、つきましてはお給金を戴きたいもんですが』と申しますと、主人はまたお話にならん吝嗇坊なのみでなく、この作男が遲鈍漢なのを知つて居ますから、たつた銅貨を三つ投げ出して、『さあ、これが三年間のお給金だよ』とやりました。

けれど、愍然な作男は、たつた銅貨三枚を大層なお錢だと思ひましたから、『もう此處で酷使はれて居ても、一生運達が上らない、こんな大金が手に入つたからにや、今から所々方々を旅をして、うまい儲口でも捜すが上分別』と、銅貨を巾着の中へ大事に藏ひこみ、何處を當ともなくのこ〳〵と出掛けましたら

この暢氣男がぶらりと野原に差しかゝつた時、向ふの方から一人の一寸法師がやつて來て、『大層な御機嫌ですね』と聲をかけましたから、作男先生大得意で、『へン、これが鬱いで居られるかい、身體はこんなに達者だしさ、懐中には素敵もないお錢を持つて居るしさ、何を不足がいはれるもんか、全體私が途方もない大枚のお錢を持つてるなあ、三年もかゝつてやつと給金に貰つたのさ』と、大金持にでもなつたやうな大變なお得意なので、一寸法師は感心した顔で『左樣ですか、そして如何程お持ちなのです』と申しますと、作男は一段と愉快さうに、『銅貨をしかも三枚さ』と、天にでも登つたやうな心持。

一寸法師は憐れつぽい聲で、『旦那、私はお見掛け通り、其の日にも窮る貧乏人で御座ります、何んと甚だ申し難ねましたが、其のお錢を下さる譯にはまゐりますま

ゐか』と只管願ひますので、根が性の善い作男は急に氣の毒になり、虎の子のやうに大事に藏つておいた巾着のお錢を、惜氣もなくやつてしまひました。

すると一寸法師は世にも嬉し氣に、『まあ御親切な方があればあるものだ、お蔭で貧乏人が助かります、其の代りお禮と申しては失禮ですが、何なりとあなたの望を三つ叶へませう』と申しますので、作男も殊の外喜んで、『そいつは何より有難い、先づ何でも射落とせる弓と、誰れでも夢中に浮かれて踊り出す胡弓と、自分が願ふことは何でも叶ふお呪禁と、かう三つを叶へてもらひたいものだ』と勝手な事を並べましたら、一寸法師は心好く、早速術を使つて望み通りに弓と胡弓とを渡し、お呪禁の仕方も敎へて、何處ともなく行つてしまひました。

一文なしの正直男は、三つの望みが叶つたので、以前よりも勇んで行手を急ぎますと、向ふに一本の樹があつて、その下に一人の猶太人が、綺麗な小鳥が枝に棲つて、それは〳〵美い聲で囀つて居るのを見上げ、欲しさうに立つて居るのに出遇

ひました。

猶太人は向ふから人の來るのを見て、『まあ何といふ綺麗な美い聲の鳥だらう、捕つてくれる人があつたら、幾千でもお錢をやるがなあ』と、態と聞ゐよがしに申しますと、作男は心の中で占めたと思つて、首尾能くまゐるやうにとお呪禁をつかひながら、猶太人の側にやつて來て、『をい〳〵、本當にお錢を呉れるなら捕つてやらうか』と申しますと、猶太人は欲しいのが一ぱいで、是非捕つて呉れと賴みました。

そこで、背中から弓をおろして、枝を狙つてヒユウと射ると、棲つて居た小鳥はばた〳〵と皷翼して、所もあらうに、樹の周圍に一面に茂つて居た茨の中に落ちました。

猶太人は占めたと、周章て小鳥を捕へようと茨の中に跳び込みますと、作男は此處だと手早く胡弓を取出しキユ〳〵〳〵擦り初めました。

胡弓の音が鳴り出すと、不思議や猶太人は急に浮かれ出し、身體を曲げたり飛び上

つたり、妙な手付で踊りましたが、何がさて刺たらけの茨の中のことですから、見る〳〵着物は引裂かれる、手足は引掻かれて血だらけになつたので、『助けて吳れ、助けて吳れ、胡弓の手を止めてくれ、己に何にも罪はないじやないか』と喚きましたが、作男は猶太人といふ奴は、世界中で一番の吝嗇坊で、又酷い奴だと聞ひて居ますので、『何の罪がないものか、貧乏人を澤山虐た罰なんだ』と、殊更胡弓の手を早めました。

胡弓の曲が早まるにつれ、猶太人はいよ〳〵浮かれて踊りだし、傷だらけになつて痛くて堪へられませんから、泣聲を絞つて、『お錢を出すから止めてくれ』と申しましたので、作男は待つて居たと云はぬばかりに、『そんなら、幾何出す』『一圓々々、『否な事だい』『五圓出す〳〵』『馬鹿を云つてらあ』『拾圓まで迫上げた』『巫山戯るない』『ゑゝつそんなら二十圓』『まだ〳〵』『ずつと飛んで五十圓』『何うして〳〵』『あ痛た……ヒヤ〳〵百圓』『少し足らないが減けてやる』と胡弓の手を止めましたので、猶太人は茨の中から、貧乏人を絞り取つた百圓のお金を投げ出しました、作

男はにこ〳〵顔で其を巾着にしつかり藏込み、ぶらり〳〵と出掛けました。

茨の中から着物を引裂かれ、血だらけになつて、やつと這ひ出した猶太人は、殘念で〳〵たまりません、早速お役所に馳込んで、追剝の爲めに有金殘らず奪れたのみか、こんな酷い目に遇はされました、そして其の追剝の奴は、背中に弓を背負ひまして、首に胡弓を懸けた奴ですと訴へましたから、役人はそれつと數多の追手を出し、驚き騷ぐ作男を難なく搦取つてまゐりました。

お役人は二人を白洲に座らせて糺しますと、猶太人は此奴が途中で私を打つやら蹴るやら辛い目に遇せて、金を奪つたのだと憐つぽく申立てますので、作男は『どうして〳〵、その金は私が胡弓を鳴らしたお禮に受取りました』と申開きましたが、お役人は作男をハツタと睨め、『盜人猛々しいとは汝のことだ』と有無を言はさず、絞架へと引立てました。

作男はいよ〳〵絞架へ乘らうとした時、お役人に『今生の名殘に、たつた一つ願ひ

をお聞届け下さいませんかと申しますと、『生命を助けて呉れといふのでなければ、隨分聞届けんものでもない』『否々、此場に及んで生命などは決して惜みません、唯胡弓をひかして下さらばそれで澤山です』とまた他意なき有樣。

胡弓と聞ひた猶太人は喫驚して、『お役人樣、彼奴に胡弓をひかしたら、そ…そ…、それは大變です』と申しすので、作男は一大事と例のお呪禁を一心不亂に口の中で唱へましたら、お役人は早速、『何より易い願ひと』苦もなく許可しました。

占めたと作男は、胡弓をキユウ〳〵鳴らて出しますと、お役人や、牢番や、猶太人が急に浮かれ出し、前後夢中にスタコラ〳〵踊り出しますのみか、お刑を見やうと絞架の周圍に集まつた人達までが、同じやうに踊り出して、宛然癲狂病院の内へでも入つたやう。

作男は此處を先途と引きたてますと、みんな躍り疲れてへと〳〵になり、免して呉れ〳〵と賴みましたがなか〳〵聞入れません、益々手を早めて絃を擦り立てました

たので、到頭お役人も半死半生の躰になり、この男の生命を赦免すのみか、先に取上げた百圓のお金も返してやると言ひ渡しましたが、作男はなか〳〵胡弓の手を止めません、唯少しばかり手を弛めたのみでした。

お役人は少し身体が樂になり、苦しい氣息をホッとつきながら猶太人に、『きさまが下らん訴を持出したばつかりに、已樣まで飛んだ目に遇つた、全體その百圓の金は何處から持つて來たんだ』と糺しますと、猶太人が多くの人から無理非道に取立てた金だと分りましたので、自分が却つて絞架に上る身となりました。

そこで作男は、左もこそと言はぬばかりに、胡弓を鳴らしながら、暢氣に何處へか行つてしまひました。

〔解說〕作男は少し惡戲が過ぎましたが、根が人を憐む無慾な性の男でしたから、いろ〳〵幸福がまゐりました、猶太人は吝嗇坊の性ですから、日頃の無理非道な報が來て、首を斬られるやうな罰が來たのです。

サー・ウォルター・ラレイ

今は昔、英國にウォルター・ラレイなる勇敢にして氣品高き人があつた。

彼は單に勇敢で氣品が高かつたのみでなく、起居動止が優容で且つ慇懃であつたから、時の皇后は彼に勳爵士の位を授けた。

予は彼が如何して皇后のお眼鏡に預かり、立身出世したかの由來を話さう。

ラレイが未だ年少であつた時、彼は一日倫敦の町を歩いてゐた、今でこそ善美を盡した立派な街衢であれ、其の當時には舗石もなければ、人道の設けもなかつたのは言ふ迄もない、ラレイは時の時樣を追つて、美しい深紅色の外套を兩肩に輕く着てゐた。

で、彼は尙ほも町をずん〳〵と行くと、其の日が雨降り揚句でもあつたのか、泥濘が多くて歩き惡くい事甚しい、彼が新調の美しい靴を汚さずに行くのは、なか

〳〵容易な事ではなかつた、彼は足元に注意して、此方へ避け彼方へ飛んで行くと、町幅一杯に擴つた泥水溜へ差掛つた、懸命に飛越せば越にられぬ事もあるまいが、尋常に歩くのでは横切る事はむづかしい。

何して越したものかと水溜の彼片へ眼を配ると、澤山な人が此方を指して來るのが不圖見えた。

これぞ時の女皇エリザベスが、綺羅を飾つた高貴の淑女や腰元の數多を召連れた一行であつた、眞先に立たれた素晴しい服裝の女皇は、同じく此の泥水溜を何して越したものかと、少なからず當惑の體で向ふを御覽になると、其處に眞紅色の外套を着た、優美な一少年の立つてゐるのがお目に止つた、扨女皇は如何にして此の水溜をお越しになつたであらうか？

ラレーは美しき服裝の人を女皇なりと氣が付いた時、自分の事は悉皆忘れてしまひ、何してお通し申さうと肺肝を摧いたが、不圖最上の案が胸に浮んだ、が、此の

案といつても、獨り彼のみに出來得ることで、他の人には考へもつかぬことであつた。

名案浮べりと喜んだ彼は、矢庭に着てゐた深紅色の外套を毟るが如く急いで脱ぎ、水溜の上に惜氣もなく敷き擴げた、斯くして女皇は美しい毛氈の上でもお歩きになるやうに、此の難所をお越しになることが出來るのである。

女皇は外套の鋪石を歩かれた、そして穢らしい泥水を安々とお越しになつた、無論召してゐらつしたお靴の踵さへ汚れなかつたのである、女皇は一寸お立止まりになり、青年に感謝の辭をお述べになつた。

やがて一行を隨へて少しくお進みになつた時、供奉の淑女に御下問になつた。

『朕が一行を物の見事に助けた彼の勇ましい紳士は何者ぢや？』

『彼の者の名はウォルター・ラレイと申します、』

と淑女の一人はお答へに及んだ、

『左樣か、何か禮せずばなるまい。』

未だ幾日ならざるに、ラレイは女皇より御殿に參上せよとのお使者に接した。

青年は喜び勇んで早速參上した、が、深紅色の外套は泥濘の敷物にしたので、其の日は着用することが出來なかつた、女皇は數多の顯官淑女が綺羅星の如く居列んだ前で、彼に勳爵士の位をお授けになつた、そして彼は其時以來、サーなる尊稱を名に附けて、女皇の寵愛の士、サー・ウォルター・ラレイと人々に知らるゝ身となつた。

言落したが、此のサー・ウォルター・ラレイと、前に話したサー・ハムフレー・ギルバートとは異母兄弟であつた。

で、サー・ハムフレーが亞米利加に最初の移住を試みた時、實に此のサー・ウォルターも同じ船で運命を共にした連中なのである、二度目の航海には如何なる理由があつたのか、サー・ウォルターは加はらなかつたが、新大陸殖民の志は少しも捨てず、

其後幾度も人を彼の土に送つた。

然し時機が未だ至らなかつたのか、或ひは準備が整はなかつたのか、彼の送つた殖民者は、徒らに千古の大森林や、殘忍獰猛な野獸の群や、野蠻未開の印甸人に膽を潰したばかりで、何等の効果をも奏せなかつた、或者は再び英國に歸り、或者は餓ゑて死し、或者は森林の中に行衛不明となるといふ有樣であつたから、流石のサー・ウォルターも亞米利加殖民を斷念してしまつた。

けれど彼は未だ英國人民の殆んど知らなんだ物を、亞米利加大陸に二つ見出した、一つは馬鈴薯で、一つは煙草であつたのである。

若し諸君にして他日足を愛耳蘭の土に踏むことがあつたなら、諸君はサー・ウォルターが亞米利加から持て來た僅かの馬鈴薯を、始めて試植した場所を土地の者に敎へられるであらう、當時サー・ウォルターは自分の友人等に、印甸人が馬鈴薯を食用とすることを說明し、西半球に栽培し得らるゝ物なら、東半球にも繁殖が出來ぬ理

由のないのを立派に證明した。

サー・ウォルターは印甸人が煙草を吸つてゐるのを見て、彼は自分も一つやつて見やうと思ひ、英國に其の葉を持つて歸つた、英國人は未だ嘗て煙草なるものを見たことは無論、聞いたこともなかつたのである、で、彼等はサー・ウォルターが木の葉を捲いて口に啣へ、鼻から煙を出してゐるのを見て異樣の感に打たれた。

彼が椅子に腰掛けて、心長閑に喫煙してゐた或日のことである、召使が何か用があつて彼の部屋に入つて見ると、主人の頭の上で煙が渦を捲いてゐるので、頭から火事が起つたのだと喫驚した。

召使は世にも稀れなる一大事と、倉皇と水の一杯ある手桶を持つて來て、矢庭に主人の頭から浴せた、此の情ない忠義で火事は無論大事にならぬ内に消えたが、濡佛になつた主人は、飛んでもない災難に笑ふことも出來なかつた。

這麼滑稽もあつたが、程なく喫煙は國中到る所に行はれ 今では諸君も知る如く、

世界の隅から隅まで行渡つてしまつた、若しサー・ウルヲター・ラレイが煙草なんか持ち込んで吳れなんだら、喫煙の惡風も是程早くは弘らなかつたらうに。

ポカホンタス

嘗てジョン・スミスなる大層勇敢な人があつた、彼が亞米利加に足痕を印した頃は、さしも文明開化を誇る新大陸も當時は倒る處大森林ばかりで、其の間を兇猛な野獸や印甸人が彷徨つてゐたのである、で、彼に關する冒險譚は非常に澤山ある、其の或物ば無論事實であらうが、又荒唐無稽な架空譚も無いではない、其の架空譚の內に這麽のがある——

或日スミスが森を通ると、四五人の印甸人に襲はれて生擒にされ、彼等の王の前に引摺り出されて、否も應もなく殺される事となつた。

そこで、殘忍兇惡な印甸人等は一つの大きな石を持つて來て、スミスに其の上へ

頭を載せて横たはらしめた、そこで脊高の二人の印甸人が手に〳〵大きな棍棒を提げて來た、王や近習の面々は、面白い觀物だと言はぬばかりに周圍を取卷いた、二人の印甸人は棍棒に滿身の力を籠めて振上げた、これで石の上の頭を歐潰す積りである、スミスの生命は今や間一髪。

此の時遲し彼の時早し、印甸人の一少女が駈けて來て、庭矢にスミスと振上げた棍棒との間に跳込んだ、少女の名はポカホンタスと呼ばれで、王が寵愛の姫である、彼女はスミスの頭を緊と抱きしめ、自分の頭を彼の頭の上に載せて、

『父上！』

と眞實の籠つた聲を絞つて、

『何卒此の方の生命を助けて下さい、此の方が父上を何もなさらん事は私が受合ひますばかりでなく、私共とお友達にならねばならぬ筈では御座いませんか。』

棍棒を振上げた二人の印甸人は、スミスの頭を毆潰す譯にいかん、毆潰せば王の

秘藏娘にも同じ運命を負はせねばならぬ、王も如何して宜いか少なからず躊躇したが、到頭側の者に何か耳語して、スミスを扶け起して繩を解かしめた。

翌日王は幾多の部下に護衛せしめて、スミスを家に歸してやつた。

以後ポカホンタスの生涯は白人達の友となり、彼等の爲めに盡した業は少なくない。

ジョージ・ワシントンと彼の手斧

北米合衆國建國の父祖ジョージ・ワシントンが未だ至つて幼少の時である、彼の父は彼に一挺の手斧を與へた、手斧はぴか〳〵と光つた新しいのであつたから、ジョージの喜びは一方でなく、手當次第に劉り廻はつて得意であつた。

彼は瀬りに手斧を振舞はしながら庭に來て見ると、其處に一本の樹があつて、夢中になつてゐる彼には、其の樹が『斬るなら俺を斬つて見よ』と言つてるやうに思

はれた。

ジョージは屢々父の下男が森で大きな樹を伐り倒すのを見た事がある、そして彼は伐られた樹が、大きな音をして倒れるのを見るは、嘸愉快な面白い事であらうと思つたので、早速手斧を振上げて木樵の仕事に取掛つたが、其の樹は生憎細い幹だつたので、大きな音もせず手もなく伐り倒されてしまつた。

間もなくジョージの父が庭に出て見ると此の仕末なので、

『誰だ！　私の大事な櫻の樹を這麼酷い事をしたのは？』

と怒氣滿面の體で、

『國中に只一種類しかない珍らしい、なか〳〵廉價くでは買へない樹だつたに！』

ジョージは什麼事とは露知らず、手斧の切味でも自慢する位で來て見ると、父の怒りは絶頂に達してゐて、

『櫻の樹を伐つた奴を知つてゐたら、私は……無論の事……私は……』

と凄じい程の權幕であつた。

『お父さん！』

とジョージは少しも臆せず、

『其の櫻の樹は、私が自分の手斧で伐つたのに相違御座りません。』

父の怒りは見る間に融けて、

『ジョージよ、』

と言ふより早く幼き我が子を抱き緊めつゝ、

『ジョージ、能く秘さずに言つて呉れた、お父さんはお前が僞言を言ふのを聞くよりは、櫻の樹の一打位無くする方が優であつたのだ。』

グレース・ダーリング

凌晨の天未だ明けきらぬ十一月の暗き或る朝である、海上には嵐があつて、大き

な波が低く垂れた雲を洗はんとしてゐる、船は今方ファーン・アイランドの冲に於て暗礁に打上げられ、怒濤の爲めに其の一半は洗ひ去られた、他の一半は危ふく岩の上に殘されて、生殘つた乘組は其れに縋付いてゐるものゝ、無情の浪は其の一半をも餘さじと呑んでかゝる、人々が底の藻屑となるのも寸時の後であらう、眞にこれ風前の燈火！

噫！　半ば溺れたる是等不幸の人を救はんとする者はないのであらうか、危險は刻々に迫つて來る。

海岸に近き一小島には燈明臺がある、其處には此の嵐の夜を交睫みもせぬグレース・ダーリングが、浪の響き風の叫びにも耳を傾けてゐた。

グレースとは燈臺守の娘の名である、彼女は物心の付いた頃から、父と共に年久しく此處の海岸に淋しい生活を續けてゐたのである。

此の世も碎けよとばかり猛り狂ふ風や浪の音の合間に、地獄の底より救ひを呼ぶ

が如き聲、夜の暗黑を通じて二度三度彼女の鼓膜に觸れた、彼女は其の度毎に床を蹴つて起上つた、けれども外は文目も分かぬ闇である。

漸やく曉の天東より白らみて、海上ほの〴〵と明け渡る頃、一浬許りを隔てゝ、咆ゆるが如き怒濤の中に圍まるゝ一艘の難破船あり、乘組の人今沈まんとする帆柱に縋つて、狂氣の如く救ひを呼ぶ光景が彼女の兩眼を射た。

『彼の人達を救はなければなりません、』

とグレースは決心の色を面に浮べて、

『直ぐと端艇で出掛けましつ！』

『とても駄目だ、彼處まで端艇で行かれないよ。』

と彼女の父は判然と答へた、父は元より老人である、多年の燈臺守の職は、彼を

して恐ろしき浪の力が到底人力を以て抗す可からざるを洞察せしめたのである。

『父上！けれど此處にゐて彼の人達の死ぬのを空しく見てはゐられません、出來ぬ

迄も救つて見ませう。』

事茲に至つて、父は健氣なる娘の言葉に否とは言ひ兼ねた。

身仕度に少時を費したる父子は、燈臺用の大端艇にて乘出し、腕の限り滿身の力を二挺の撓に籠めて、難破船を目的に漕ぎに漕いだ、げれど娘が言葉に最初應ぜなかつた父が多年の經驗は虛言でない、木の葉の如き端艇は小山のやうな浪に弄ばれ、到底岩まで漕ぎ着けるのは不可能らしく見えた。

一度志せば金鐵をも貫くとかや、父子は死を賭して岩の間近まで漕ぎ寄せた、けれども危險は刻一刻に增して來る、浪は兇暴の度を以前より加へた、端艇に當つて飛沫と散る浪は、雄々しき少女の勇氣と熟練とがなかつたら、粉微塵に碎け飛んだでもあらふ。

父子の熱誠に天も哀れと思つたのか、あらゆる困難と鬪つた末、父は漸やくにして難破船に這ひ上つた、グレースは一人端艇に踏留つて懸命に流されじと橈を握つ